記　入　日　2016 年１２月２８日

１．概　要

実践団体名	仙台市立郡山中学校		
連絡先	０２２－２４８－００７１		
プランタイトル	郡山中学校が小学校や地域と協働する防災教育活動プラン		
プランの対象者※1	中学生、小学生、地域住民、保護者・ＰＴＡ、教職員、防災関係者	**対象とする災害種別**※2	地震、津波、水害

※1　別紙「記入上の留意点」の1．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※2　別紙「記入上の留意点」の2．項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

東日本大震災では防災・減災等に関する様々な課題が露呈されたことから、その解決に向けた実践的な防災教育を推進する。そのメインプランは「中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練」を実施することで、現在および将来を含めた地域防災の担い手を育成し、地域の防災力と防災・減災の意識を高め、地域と協働する教育を目指している。また、大震災の被災状況と現況を知り、被災者との交流と復旧・復興に向けた支援活動を行い、奉仕的精神と自助と共助を育成し、生き抜く力の糧を学ぶ。そして大震災の教訓を学び、継承し、地域特有の防災・減災文化の構築とその在り方について追究していく。

【プランの概要】

1、津波被災地の視察や交流、津波被災農家に弟子入り体験活動を行い、復旧・復興の現状や被災者の心情とその変容を知り、被災から立ち直って再生・復興に向けて頑張り続ける農家や住民の方々から、生き抜く力の糧を学び取る。そして、どんな困難や苦難にも立ち向かう心を培う。
2、中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練を毎年行い、地域防災の力と意識を年々高め、防災・減災の知識とスキル、そして自助と共助の術を習得させる。
3、防災教育活動を通じて、中学生の地域貢献の活性化を図り、生徒会や部活動等の単位だけでなく、全校体制で小学校や地域に奉仕活動を展開し、小・中学生と住民が共に防災教育とその実践に取り組む。
4、学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する。
5、本プランの実践とその成果は、生徒や教員が積極的に外部発信し、被災地支援と防災教育の拡充を図る。

【期待される効果・ここがおすすめ！】

1、津波被災地視察や交流と農家に弟子入り体験により、被災者の現状と心の変容や復興に向けた取組とその意欲・姿勢を知り、理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが未来を切り拓き、生き抜く力を学び取る。
2、中学生が主導する地域防災訓練を行うことで、将来の地域防災を担う人材が育成され、自助と共助の術を身に付けた人材が毎年増員されることにより、確実に地域防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりに資する。
3、学校・中学生が地域を巻き込む防災教育を実践展開し、住民と共に防災・減災に関する知識・意欲・態度を培う。
4、防災教育を通じて学校と地域が協働し、両者の絆を強め、希薄な人間関係等の地域が抱える課題の解決を図る。
5、本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。

２．プランの年間活動記録（2016 年）

	プランの立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	本年の企画計画を周知		○地震想定した校舎から校庭への避難訓練
5 月	○津波被災農家に支援依頼と企画説明	○小学校と市民センターの地域防災訓練の検討・協議	
6 月	○１１月防災訓練の支援組織との企画の協議･検討	○９月津波被災地の視察・交流の企画検討	
7 月		○９月津波被災地の視察・交流の現地打合せ	○地区ごとに中学生が集団下校訓練
8 月	○津波被災農家に弟子入り体験の企画・協議 ○１１月地域防災訓練の支援を消防署に依頼	○９月津波被災農家弟子入り体験の現地視察と実施計画の確認	○科学部が小学生に科学実験講座、家庭部が幼児に物作り教室、吹奏楽部が夏祭にて演奏披露 ○大阪市の中学校が来校して学習成果等の交流 ○小･中学生と住民が合同で地域清掃
9 月	○１１月防災訓練の支援組織との計画・準備の協議・検討	○１１月地域防災訓練で生協とホームセンターとの搬入物資の数量等の支援準備を確認 ○消防署と１１月訓練の準備協議	○津波被災農家による講演 ○１年生が津波被災農家に弟子入り体験 ○２年生が津波被災地視察と被災中学校と交流 ○日本青年会議所１６人が来校し､本校の防災教育を研修
10 月	○ボランティア・スピリット賞での成果発表準備	○中学校と地域組織や行政等が避難所運営マニュアルと 11 月地域防災訓練を検討・協議	○小学校と市民センター開催の地域防災訓練を中学生が避難所開設や炊き出し支援 ○防災教育チャレンジプランにて中間報告
11 月		○地域防災の使用物品等と準備状況の確認	○火災想定した校庭への避難訓練 ○生徒が主導する地域防災訓練 ○ユネスコスクール東北大会で生徒会が成果発表・２年生が合唱披露
12 月	○次年度開催の全国政令都市大会で防災教育発表の企画・製作	○防災教育チャレンジプラン最終報告会の準備と協議	○小中連携事業:小学６年生が中学校の授業体験と部活動見学 ○ボランティア･スピリット賞全国大会で生徒会が成果発表
1 月		○本年度の実践の評価分析活動	○ぼうさい甲子園で表彰 ○防災教育の評価の実施と公表
2 月	○次年度の防災教育の実施企画・計画立案	○教育助成財団等への報告書等の作成	○防災教育チャレンジプランにて最終報告
3 月		○次年度の計画・企画	○故郷プロジェクトの開催

３．実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：　ＮＯ．０　】※3

タイトル	平成２８年度　防災教育の実践概要
実施月日（曜日）	平成２８年度　：　平成２８年４月～平成２９年３月
実施場所	実践：本校と学区内の地域、津波被災地（宮城県亘理町・仙台市若林区） 発表：ユネスコスクール東北大会（宮城教育大学）、 ボランティア・スピリット賞（ブロック大会：札幌、全国大会：東京）
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：渡邉静男・他２名　　海野徳仁　　髙橋和之 所属・役職等：（株）荒浜アグリパートナーズ、東北大学教授、市教委
所要時間または「コマ数×単位時間」	【実践プログラムごとに記載】
プログラムのカテゴリ、形式※4	16（避難・防災訓練）、13（体験学習）、９（校外学習・移動教室）、７（学校内クラブ活動）、４（総合的な学習の時間）、３（講演会・シンポジウム）、12（研究）
活動目的※5	17、その他：プランの全体計画を提示しているため ※本プランでは以下の活動目的を含む ２（防災に役立つ資料・材料づくり）、３（災害に強い地域をつくる）、４（災害を想定した訓練）、６（防災に関する知識を深める）、７（技術を身につける）、８（防災意識を高める）、９（災害対応能力の育成）
達成目標	防災教育に係る年度計画の実践プランを実施、分析、評価、改善
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	平成２８年度の防災教育の計画概要は、①震災と教訓を学ぶ、②復興を知る、支援することを実践のねらいとして、８月下旬には本校学区において、町内会と学校が連携し、住民と小中学生が地域清掃活動を共に行い、交流することを通じて、大震災時の助け合い・支え合った共助を風化させずに受け継ぎ、地域の復興・復旧状況を確認している。そして、１・２年生が９月初めに津波被災農家３人による講演を聴き、その後の９月中旬に１年生が仙台市沿岸部、２年生が県南部の沿岸部の津波被災地を視察し、復興支援や農家や中学生と交流を行い、その報告を生徒や保護者、地域住民に行っている。 ③の防災・減災の知識、スキル、行動を習得するため、１０月に学区内の小学校と市民センターが合同で開催する地域防災訓練を中学生が支援する。その後の１１月には、本校で中学生が主導して住民・

防災教育の実践概要（平成28年度）

実践プランのねらい	実践プラン	時　期
①震災と教訓を学ぶ ②復興を知る、支援する	・津波被災農家の講演 ・生徒が津波被災地の視察と支援 津波被災農家や中学校と交流	９月上旬 ９月中旬
③防災・減災の知識、スキル、行動を習得する メインプラン	・生徒が小学校と市民センターが行う地域防災訓練を支援 ・生徒が主導する地域防災訓練 ・防災教育シンポジウムを開催	１０月 １１月
④学習成果を発信する	ユネスコ・スクール東北大会等で発表 各種大会にて実践発表、資料公表	１１月 １２月
⑤実践を評価する 自己・外部評価、第三者評価	・PDCAによる自己・外部評価 ・防災教育チャレンジプラン等で報告と講評	１月 ２月

	小学生等が参加する地域防災訓練を行っている。④学習成果を発信するについては、ユネスコスクール東北大会で生徒会が成果発表をしたり、防災教育チャレンジプランにて本校の防災教育を実践発表したり、各種の発表会にて学習成果を発信している。今年度には、ボランティア・スピリット賞の北海道・東北ブロックにて１１月にブロック賞を受賞し、表彰式において生徒会が成果を発表している。さらに、１２月には同賞の全国大会においても、生徒会が実践成果の交流も行っている。⑤として、学習実践の内容と方法そして成果や課題などについて、自己評価や外部評価として生徒と保護者、教員が協働して評価を実施し、その後に外部の方々による学校関係者評価を行っている。さらに、防災教育チャレンジプランにて第三者評価を、防災教育の専門家や研究者からいただく。
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	【実践プログラムごとに記載】
参加人数	【実践プログラムごとに記載】
経費の総額･内訳概要	経費の総額：１，４８１，２６９円 【内訳概要】 ○津波被災地での視察・交流：バス借上料　４７２，８５６円 農業園芸センター会議室使用料　７，１２８円 ○講師謝礼　被災地の語り部　２０，０００円 防災教育シンポジウム・大学教授　１０，０００円 ○炊き出し　ガス器具調査料・ガス料金等　２６，０２８円 ガス器具・寸胴鍋等の備品代　６２５，２５０円 食材費(カレー、豚汁)　１８３，０９６円 割り箸・井・洗剤等消耗品費　１３６，９１１円
成果と課題	本・実践プログラム番号ＮＯ．０は、平成２８年度・年間の防災教育の実践概要とその流れを示し、実践プランの全体像を表している。その実践展開においては、“実践のねらい”を定め、①震災と教訓を学ぶ、②復興を知る・支援する、③防災・減災の知識、スキル、行動を習得する、④学習成果を発信する、⑤学習実践を評価する、これらの順にて構成し、本プランの目的達成に挑んでいる。したがって、本プログラムの成果や効果については、「６、成果と課題(実践したプラン全般について)」で記述する。 なお、各実践プログラムの成果や課題については、実践プログラムごとに記載する。
成果物	報告書「安全・安心な地域づくりに資する、中学生が主導する防災教育と地域防災訓練」

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。(複数選択可)
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：　ＮＯ．１　】※3

タイトル	津波被災地への支援活動
実施月日（曜日）	平成２７年８月　１日(土) （1）生徒会と高校・大学による津波被災地・女川への継続支援 平成２８年９月１３日(火) （2）１年生約２００人による津波被災農家に弟子入り体験 （3）２年生約２００人による津波被災地の視察と中学校との交流
実施場所	平成２７年：宮城県女川町 平成２８年：１年生・仙台市若林区荒浜地区 ２年生・宮城県亘理町荒浜地区
担当者または講師	（1）**津波被災地・女川への継続支援** 担当者・講師等の区分：本校担当 氏　　名：　高橋教義 所属・役職等：　仙台市立郡山中学校・校長 （2）**津波被災農家に弟子入り体験：仙台市若林区荒浜地区** 担当者・講師等の区分：担当者・講師 氏　　名：　渡邊静男 所属・役職等：(株)荒浜アグリパートナーズ・代表取締役 （3）**津波被災地の視察と中学校との交流：宮城県亘理町荒浜地区** 担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：　大友秀之　　渡邉裕之 所属・役職等：亘理町商工観光課・主事、荒浜中学校・校長
所要時間または「コマ数×単位時間」	(1)～(3)ともに、８：００～１６：３０
プログラムのカテゴリ、形式※4	１(イベント・行事)、２(講習会・学習会)、３(講演会)、４(総合的な学習の時間)、９(校外学習)、１３(体験学習)
活動目的※5	(1)と(3)：６(防災に関する知識を深める) (2)：その他(津波被災地の復興を知り、支援する)
達成目標	1、津波被災地の視察・交流や津波被災農家に弟子入り体験により、被災者の現状と心の変容や復興に向けた取組とその意欲・姿勢を知り、理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが未来を切り拓き、生き抜く力を学び取る。 2、被災地視察と被災者との交流から、どんな困難や苦難にも立ち向かう心を培う。 3、本プログラムを通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	**（１）平成２７年度　津波被災地・女川への継続支援** 東日本大震災で未曾有の被害を受けた女川町は、宮城県北部の沿岸地帯にあり、地震の揺れと地盤沈下、そして大津波により、町は壊滅的な被害を受けた。震災後、仙台市内の中学校、高校、大学の教員と生徒・学生、そして PTA が、「女川を元気にする会」を結成し、継続して支援と交流を行っています。本校から生徒会役員７人と先生２人、PTA 会長の計１０人が参加し、今年は仙台市内の中学校３校、高校、大学から総勢・約１２０人が視察・交流活動を行った。 しかし、平成２８年度は様々な事情から、継続して行ってきた「女

川を元気にする会」の活動が延期せざるを得なかった。次年度以降には、各校種と女川町との綿密に調整を図り、会を再開する予定である。

慰霊碑への献花と祈り・養殖場の視察

貼り絵を制作と贈呈、合唱・空手・ダンス等を披露

（２）平成２８年度「津波被災農家に弟子入り体験」

１年生･約 200 人が､仙台市沿岸部の津波被災地で農業を営む方々を支援するため、９月１３日に被災地を視察し、その後に綿花畑の除草作業を行っている。大震災前は広大な水田地帯であったものの、農家は津波の塩害が残る中、稲作に変わり手作業で綿花を栽培している。生徒たちは小雨が降るにも関わらず、懸命に除草作業に取り組んでいた。

（３）平成２８年度・津波被災地の視察と中学生との交流

２年生・約 200 人が、県南部の沿岸部で津波により被災した地域と中学校を９月１３日に訪問している。生徒は、語り部さんの案内で説明を聞きながら被災地を視察し、津波被災で高床式の新校舎で学んでいる中学生と交流活動を行っている。交流では、互いの学校の紹介や防災学習の成果発表を行い、両校生徒が人文字「ガンバロウ」を制作している。

８名の語り部さんの案内で被災地を視察

津波被災の中学校と交流

次に、平成２８年度に実施している１年生「津波被災農家に弟子入り体験」と２年生「津波被災地の視察と中学生と麻交流」活動について、２１項目からなるアンケート調査を実施し、その結果の抜粋を以下の表に示した。各調査内容について選択肢“大いに”と“まあまあ”を合わせると概ね８割を超えている。

	調　査　内　容	学年	大いに	まあまあ
1	大震災のマスコミ報道を受けて、大変なことが起きていることを感じる。	１年	８５．６	１３．１
		２年	９０．５	７．９
8	被災地を実際に視察して、被災地の復旧・復興に自分の力を活かしたいと思う。	１年	３９．９	４７．５
		２年	３９．７	３９．７
10	被災地のために、何ができるか考えたいと思う。	１年	４１．９	４０．６
		２年	４３．７	３６．５
12	今回の活動を通じて、このようなボランティア・交流は必要であると感じた。	１年	６５．６	２５．６
		２年	６０．０	２８．０
15	今回の活動を通じて、どんな苦難にも立ち向かう勇気と力を感じた。	１年	５８．５	２８．３
		２年	５７．９	２７．８
20	どんな苦難にも立ち向かい、苦難を乗り越える努力をしていきたい	１年	６５．０	２６．９
		２年	６１．１	２９．４

この結果からは、震災から５年が過ぎた今も生徒はマスコミ報道により震災のたいへんさを認知している。そして、生徒は被災地のために自分の力を活かしたい、何ができるか考えたいという思いを持ち続けている。このように、体験活動によりボランティアと交流の必要性を改めて感じ取り、被災者から大きな感銘を受け、それを糧にして生き抜く力が育まれていることが分かる。

さらに、アンケート調査の２１項目間で相関分析を行った。

H28.9【 1年生 】津波被災地の視察 ＆ 被災農家に弟子入り体験　（相関分析）

NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
1		0.34	0.12	0.17	0.10	-0.02	0.28	0.27	0.03	0.25	0.24	0.27	0.34	0.35	0.19	0.32	0.16	0.32	0.39	0.32	0.38
2			0.24	0.25	0.28	-0.05	0.23	0.53	0.07	0.38	0.34	0.27	0.41	0.34	0.28	0.53	0.39	0.41	0.42	0.39	0.33
3				0.11	0.13	0.08	0.06	0.29	0.03	0.39	0.18	0.11	0.23	0.21	0.22	0.31	0.24	0.18	0.21	0.24	0.08
4					0.69	0.10	0.14	0.33	0.10	0.30	0.39	0.13	0.26	0.23	0.29	0.32	0.33	0.28	0.29	0.23	0.21
5						0.08	0.14	0.29	0.04	0.26	0.38	0.16	0.37	0.19	0.34	0.33	0.32	0.21	0.23	0.18	0.19
6							-0.07	-0.06	0.12	-0.12	-0.06	-0.09	-0.15	-0.05	-0.07	-0.11	-0.15	-0.17	-0.10	-0.15	-0.23
7								0.30	0.11	0.18	0.23	0.26	0.20	0.24	0.24	0.24	0.21	0.17	0.28	0.26	0.27
8									0.21	0.47	0.31	0.31	0.35	0.39	0.36	0.47	0.44	0.48	0.44	0.40	0.39
9										0.09	-0.02	-0.14	-0.02	0.03	-0.04	0.10	0.02	0.11	0.11	0.17	0.07
10											0.23	0.17	0.38	0.33	0.37	0.41	0.46	0.46	0.37	0.39	0.41
11												0.41	0.36	0.31	0.27	0.36	0.26	0.31	0.35	0.36	0.37
12													0.46	0.40	0.27	0.38	0.18	0.17	0.31	0.20	0.32
13														0.51	0.45	0.57	0.41	0.45	0.35	0.28	0.42
14															0.49	0.47	0.23	0.28	0.43	0.25	0.38
15																0.39	0.41	0.38	0.45	0.40	0.31
16																	0.58	0.54	0.63	0.43	0.46
17																		0.64	0.49	0.54	0.47
18																			0.61	0.59	0.56
19																				0.52	0.48
20																					0.50
21																					

H28.9【 2年生 】津波被災地の視察 ＆ 被災中学校との交流　（相関分析）

NO	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
1		0.20	0.13	0.13	0.26	0.07	0.23	0.16	0.20	0.09	0.14	0.07	0.07	0.25	0.14	0.20	0.21	0.23	0.22	0.13	0.23
2			0.44	0.29	0.26	-0.08	0.12	0.53	0.12	0.52	0.38	0.43	0.54	0.52	0.45	0.47	0.43	0.52	0.52	0.41	0.48
3				0.30	0.37	-0.05	0.35	0.41	0.04	0.40	0.33	0.31	0.39	0.38	0.34	0.47	0.43	0.42	0.41	0.46	0.41
4					0.71	0.11	0.26	0.14	0.03	0.23	0.15	0.15	0.27	0.26	0.32	0.29	0.14	0.29	0.27	0.28	0.24
5						0.04	0.28	0.29	0.02	0.20	0.22	0.24	0.31	0.32	0.28	0.41	0.26	0.29	0.30	0.37	0.40
6							0.06	-0.08	0.14	0.05	-0.09	0.03	-0.03	0.00	-0.11	-0.07	-0.08	-0.13	-0.12	-0.09	-0.11
7								0.41	-0.04	0.30	0.33	0.18	0.24	0.30	0.34	0.34	0.25	0.30	0.26	0.38	0.33
8									-0.02	0.58	0.44	0.41	0.38	0.42	0.46	0.44	0.42	0.40	0.44	0.52	0.41
9										0.16	-0.08	0.03	-0.09	-0.02	-0.03	-0.13	-0.09	-0.03	-0.05	-0.11	-0.10
10											0.42	0.44	0.36	0.38	0.46	0.48	0.54	0.38	0.41	0.49	0.37
11												0.47	0.42	0.39	0.43	0.46	0.54	0.49	0.48	0.47	0.52
12													0.50	0.51	0.42	0.42	0.40	0.39	0.39	0.43	0.35
13														0.77	0.55	0.61	0.51	0.57	0.60	0.56	0.63
14															0.67	0.63	0.52	0.59	0.68	0.56	0.64
15																0.57	0.59	0.69	0.68	0.62	0.51
16																	0.70	0.59	0.60	0.67	0.65
17																		0.61	0.63	0.69	0.58
18																			0.77	0.61	0.54
19																				0.61	0.57
20																					0.65
21																					

１年生において最も相関係数が高かった項目は、「自分に出来ることを探し続け、チャレンジしたいと思う」と「人に夢や希望、勇気を与えられる人になりたいと思う」の項目間であり、津波被災農家に弟子入り体験して奉仕的精神が培われたことが分かる。２年生では、「人に夢や希望、勇気を与えられる人になりたいと思う」と「自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う」項目間、「自分の力が人の為に役になって、嬉しいと思う」と「人が人を助けることは、大切なことだと感じた」項目間で強い相関を示し、“人を助けること”が人に夢や希望、勇気に繋がり、自らの喜びになることを認識したことが分かる。

準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	（１）津波被災地・女川への継続支援 ・人材：仙台市内の中学校３校の生徒、高校生、大学生、PTA、大学関係者など　約１２０人 ・材料等：貼り絵細工の製作品 （２）津波被災農家に弟子入り体験 ・人材：本校生徒１年生・約２００人と教員９人 ・道具：除草作業に必要な長靴、軍手、雨具など （３）津波被災地の視察と中学生との交流 ・人材：本校生徒２年生・約２００人と教員９人、現地の語り部８名、津波被災校の中学生・約９０人と教員１６人 ・道具・材料等：ＣＰやプロジャクター等
参加人数	（１）支援者約１２０人、女川町民等約１５０人 （２）生徒と教員の約２１０、被災農家１０人 （３）本校生徒と教員約２１０人、語り部８人、被災校の中学生と教員約１００人
経費の総額･内訳概要	○津波被災地での視察・交流：バス借上料　４７２，８５６円 ○農業園芸センター会議室使用料　　７，１２８円 ○講師謝礼　被災地の語り部　２０，０００円(2,500 円×８人)
成果と課題	【成果】 アンケート調査とその分析結果から、以下の２つの成果が得られている。 ○津波被災地の視察や交流と農家に弟子入り体験により、被災者の現状と心の変容や復興に向けた取組とその意欲・姿勢を知り、理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが未来を切り拓き、生き抜く力を学び取る。 ○本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。 【課題】 アンケート調査から、調査 N01「大震災のマスコミ報道を受けて、大変なことが起きていることを感じる。」では、選択肢“大いに”の割合は１年生 85.6%、２年生 90.5%であることから、大震災から５年過ぎた現在でも、生徒はその猛威と恐怖、不安を抱いていることが分かる。本実践プログラム「津波被災地への支援活動」では、大震災の報道を受けて、実際に被災地を視察し、その地で生活している方々と交流を図り、自らの生き抜く力の糧を学び、前に進む意欲と熱意を感じ取っている。しかし、それらが自らの身に起きたこと、起きていることとして、どれほど認知されたかは不明である。被災者の立場になって考え、想像し、苦しみや悲しみを感じ、そして自らのこれからに思いを馳せ、自らが努力していくかが、一過性ではなく、真に生き抜く力の糧を学び取ったことの証になるものと考える。つまり、津波被災地への支援活動から学んだことは、生徒自らがこれからにどれだけ活かされ続けるかが課題となる。
成果物	（１）贈呈した貼り絵細工 （２）・（３）アンケート調査の分析結果を含む報告書

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：　ＮＯ．２　】※3

タイトル	学校と地域・行政との連携推進
実施月日（曜日）	（１）学区内の市民センターと小学校が開催する地域防災訓練の支援 平成２８年１０月１５日（土） （２）学校と地域・行政等との防災会議　１０月６日（木） （３）小・中連携推進のための合同研修会　８月２３日（火）
実施場所	（１）八本松市民センターと八本松小学校 （２）郡山コミュニティセンター （３）本校・郡山中学校
担当者または講師	（１）担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：三野宮　利男 所属・役職等：八本松連合町内会長 （２）担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：関口　吉信 所属・役職等：郡山地区連合町内会長 （３）担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：　高橋教義、福田喜美恵、佐藤貢、相澤経利 所属・役職等：　郡山中校長、①東長町小学校長、②八歩松小学校長、③郡山小学校長 本中学校区は２つの連合町内会からなり、３つの小学校がある。
所要時間または「コマ数×単位時間」	（１）　８：００～１２：００　　（２）１３：００～１５：３０ （３）１３：３０～１６：００
プログラムのカテゴリ、形式※4	（１）１６（避難・防災訓練）、１３（体験学習）、２（学習会） （２）１７（その他：本校避難所運営マニュアル改訂と中学生が主導する地域防災訓練の検討など） （３）２（講習会・学習会）
活動目的※5	（１）４：災害を想定した訓練 （２）その他：学校と地域が協働する本校避難所運営マニュアル作成 （３）その他：小・中学校が連携支援する防災教育や学力向上、生徒指導などの研修会
達成目標	○防災教育活動を通じて中学生の地域貢献の活性化を図り、小学校や地域に奉仕活動を展開し、小・中学生と住民が共に防災教育とその実践に取り組み、地域防災力の向上を図る。 ○ 学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全･安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	**（１）学区内の市民センターと小学校が開催する地域防災訓練の支援** 本校学区内にある八本松市民センターと八本松小学校は、2011 年の東日本大震災から毎年、合同開催している地域防災訓練に、本校生徒が主体的に参加支援している。この小学校を卒業した本校生徒が、市民センターと小学校のそれぞれの会場に分かれて避難所設営や運営補助、炊き出し準備・配給等を行っている。 この合同訓練では､次のような内容で行われており､中学生が様々な訓練を担当して、体験学習に参加して地域住民と共に防災訓練に臨んでいる。 ①避難訓練：一時避難場所に避難後、避難所へ集団避難の訓練 ②訓練内容：AED、救護手当、発災対応、発電機・給水機器操作、消火器、仮設トイレ組立、炊き出し、防災無線使用

③体験学習内容：濃煙体験、防災クイズ、DVD 視聴
④参加者数：参加者は毎年 1,000 人を超えているが、中学生の参加はこの小学校の卒業生の５割程度に止まっている。その理由は、この時期が部活動の新人大会とも重なっており、中学１・２年生の大会選手でないものだけが参加できるためである。

（２）学校と地域・行政等との防災会議

本校学区域の防災・減災を推進するため、町内会と本校が主体となり、避難所運営に係る関係機関が参加して防災会議を開催している。今年度の会議では、仙台市避難所雲得マニュアルの改訂と１１月に開催する「中学生が主導する地域防災訓練」について審議を行っている。本マニュアルは指定避難所である学校が避難所になる際に使用されるものであり、今年度は「大雨時　避難・開設編」を追加記載するため、会議が開催されている。その上で、中学生が主導する地域防災訓練と関連性を図り、本マニュアルに基づいて中学生が主導する住民参加型の防災訓練を行うこととし、中学生との連携・支援の在り方等についても協議・検討している。

参加者・機関は、連合町内会長、各町内会長、中学校長、PTA 会長、民生委員児童委員協議会長、社会福祉協議会理事、日本赤十字社郡山奉仕団副団長、婦人防火クラブ郡山支部長、行政（健康福祉局、太白区保険年金課と区民生活課、建設局下水道経営部、環境局ごみ減量推進課）などであり、地域の多様な組織が参加して地域防災の取組を推進している。

（３）小・中連携推進のための合同研修会

本校の中学校区内には３つの小学校があり、防災教育や学力向上、生徒指導等について連携推進を図るため、毎年の夏季休業中に４校の小・中学校の全教員を対象にした合同研修会を開催している。

はじめに全体会を開き、校長や担当教員が小・中学校４校のそれぞれの教育実践の取組概要や防災教育などの特色ある教育活動、各

	校の現況等について研修と情報交換を行っている。本年度も全体会に続いて、現職研修、学力向上、生徒指導、特別活動・特別支援教育の４分科会を開催し、各校の取組状況や課題等の解決に向けた連携とその実践の在り方・推進方法などについて研修と協議や検討を行った。分科会後に再び全体会を開催し、各分科会の研修内容の報告を行い、今年度の防災教育等での連携推進事業を確認し、閉会している。 生徒指導 学力向上 特別活動・特別支援教育 現職研修
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	（１）学区内の市民センターと小学校が開催する地域防災訓練の支援 人材　：小・中学生、住民、行政等 材料等：AED、発電機、応急給水、仮設トイレ、炊き出し器材 （２）学校と地域・行政等との防災会議 人　材：町内会長、中学校長、社会福祉協議会、日本赤十字社、民生委員、児童委員、婦人防火クラブ、行政（市役所・区役所）等 （３）小・中連携推進のための合同研修会 人　材：小・中学校の全教員 材料等：全体会の資料（中学校からは、地域防災訓練の配布資料）各分科会の配付資料
参加人数	（１）１，０５１人　（２）２０人 （３）郡山中３４人、郡山小１６人、東長町小３２人、八本松小２３人の全教員・計１０５人
経費の総額･内訳概要	（１）町内会費と行政の補助　（２）・（３）０円
成果と課題	【成果】 ○防災教育活動を通じて中学生の地域貢献の活性化を図り、小学校や地域に奉仕活動を展開し、小・中学生と住民が共に防災教育とその実践に取り組み、地域防災力の向上を図る一助になっている。 ○ 学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全･安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する礎が構築できた。 【課題】本校は２つの連合町内会（郡山と八本松）があり、本校が開催する１１月の「中学生が主導する地域防災訓練」には郡山連合町内会との連携ができている。しかし、八本松連合町内会は１０月に八本松小と連携して行っているため、中学校区で一斉の訓練ができず、昨年度来からの課題となっている。
成果物	（２）郡山中学校・H28 の両年ともに避難所運営マニュアルの改訂版

【実践プログラム番号：　ＮＯ．３　】※3

タイトル	大震災の教訓を受け継ぐ実践活動
実施月日（曜日）	（１）集団避難訓練と集団下校訓練 集団避難訓練：４月２７日(水)、１１月１日(火) 集団下校訓練：７月１日(金) （２）津波被災農家の講演　９月１日(木) （３）故郷復興プロジェクト：平成２９年３月１７日(金) 昨年度は３月１６日(木)
実施場所	（１）～（３）：本校及び本校学区
担当者または講師	（１）担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：三浦　敏 所属・役職等：防災主任 （２）担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：渡邊静男氏、他２人 所属・役職等：(株)荒浜アグリパートナーズ （３）担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：佐藤　頌 所属・役職等：本校の生徒会担当
所要時間または「コマ数×単位時間」	（１）～（３）：それぞれ２時間程度
プログラムのカテゴリ、形式※4	（１）：１６(避難・防災訓練) （２）：３(講演会・シンポジウム) （３）：１(イベント・行事)
活動目的※5	（１）：４(災害を想定した訓練) （２）：９(災害対応能力の育成) （３）：３(災害に強い地域をつくる)
達成目標	○津波被災農家との交流を通じて、被災者の現状やこれまでの心の変容、復興に向けた取組とその意欲・姿勢を知り、理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが未来を切り拓き、生き抜く力の糧を学び取る。 ○中学生が集団避難訓練や集団下校訓練を行うことで、自助と共助の術を身に付け、大震災の教訓として常日頃からの心構えと訓練がいかに必要かつ重要かを認識し、教訓を継承する。 ○、毎年度末に各学校が独自の実施内容を創意・工夫して全校集会を開き、大震災の犠牲者を偲び、大震災の風化を防ぎ教訓を受け継ぐ。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	**（１）集団避難訓練と集団下校訓練を継続実施** 毎年４月と１１月には、地震や火災を想定した、教室等の校舎内から校庭への避難訓練を行っている。東日本大震災の教訓として、常日頃からの心構えと訓練が、いかに重要かを認識し、教訓を継承している。生徒たちは、災害発生時に訓練が実際に

生かされるため、訓練に真剣で冷静に取り組み続けている。

訓練の自己評価の結果は、４件尺度法による質問紙で調査し、数値は選択肢“大いに”の割合を示している。

平成28年度　校庭・避難訓練の意識調査

10個の調査項目 ： 数値は「大いにできた」を選択した割合

	１年	２年	３年
①自分のクラスの避難経路について確認することができた	79.7	89.8	94.4
②先生の指示に従い、避難することができた	88.2	83.4	93.3
③外に出てから、無駄話(私語)をしないで避難することができた	38.5	45.1	65.2
④避難後の整列は速やかにできた	57.3	64.8	82.6
⑤自分のことだけでなく他の人のことも考えて避難することができた	32.6	23.8	36.7

避難経路の確認や、指示に従った避難では、３年生が９割を超えている。「無駄話なしで避難」では、三年生が６割を越えたものの、どの学年でも課題があることが分かる。さらには、「他の人のことも考えて避難」では、どの学年でも、思いやりが不足した結果となっている。ほぼ達成できた調査内容は、①「自分のクラスの避難経路を確認できた」、②「先生の指示に従い、避難することが出来た」である。

しかし、③の「外に出てから、無駄話をしないで避難することが出来た」については、１年生が４割以上で無駄話をしており、２年生と３年生でも１割を超えている。このことは、外で整列し、人数確認を遅らせ、全員が避難できたかの確認に時間がかかることに繋がり、逃げ遅れた生徒がいるか否かを、迅速に判断することに支障をきたすことになる。④の「避難後の整列は速やかに出来た」の調査結果からも、その割合に影響していることが分かる。次回への課題として、生徒一人一人が肝に銘じるよう反省をするとともに、無駄話をすることがどんな結果を生むかを、生徒一人一人が理解することが必要であると考える。

⑤の「自分のことだけでなく他の人のことも考えて避難することが出来た」については、我先にと避難口に殺到することを回避できるかが、考慮された訓練となっているかの判断できるデータと考える。どの学年も、半数以上が考慮されておらず、これからの訓練で最も学ぶ必要のある結果となっている。しかし、多くの生徒は、ケガした生徒や足が悪い生徒のことを想定した質問とも捉えており、この捉えにおいても生徒たちが弱者に配慮した、弱者を助ける行動を取れなかったことを反省させなければならない。そして、弱者が逃げ遅れることがないように、主に教員が避難を支援することも考

慮に入れて、生徒と教員が協働して臨機応変に判断し、弱者支援の行動がとれるように教育していく必要がある。

次に、毎年７月に実施している集団下校訓練は、全校生徒・約６００人が、災害や非常事態の際に、教員の引率の元で、ともに助け合い、安全を確保しながら帰宅するために行っている。まず、１８地区ごとに生徒の人数を確認し、下校で注意すべき場所等を確認し、その後に全校生徒が集い、訓練の目的・内容・注意事項を確認し合い、集団下校の訓練を行う。今年の集団下校訓練も、以下のように列が乱れることもなく、整然と行うことができている。

地区ごとの集会の様子

全校集会の様子

集団下校訓練の様子

（２）津波被災農家の講演

中学１・２年生は大震災当時、小学校２・３年生であり、大震災から５年が過ぎていることもあり、震災の状況や被害等の記憶や、継承すべき教訓等については、あまり定かな実態にない。そこで、平成２８年９月１日に、１・２年生約４００人は仙台市沿岸部の若林区荒浜で津波により全てのものを消失した農家の被災者から講話をいただき、大震災前後や震災当時の状況、そして大震災から立ち直り、未来に向けて立ち向かう心情と努力、苦労などについて、講話から学び取ることを目的に講演をいただいた。大震災から立ち直るまでの心境の変化や苦難と苦労など、農業再生・復興に向けた夢や希望、覚悟と意気込み等の講話をいただけた。生徒達は、農家の方々の力強い生き抜く姿と言葉から、どんな苦難にも逃げることなく、何があっても諦めることなく、未来に立ち向かう勇気と力を体感し、個々の生徒が心に刻み込み、これからの生きる力の糧を学び取ることができていた。

（３）故郷復興プロジェクトを毎年３月に実施

全ての仙台市立学校では、2011 年３月 11 日の大震災の犠牲者を偲び、その記憶の風化を防ぎ、教訓を受け継ぐために、各校独自の実施内容を創意して各学校で本プロジェクトを実施している。

本校では生徒会が司会進行して全校集会を開き、仙台市中学校長会が製作した復興ＤＶＤ「ともに、前へ」を視聴し、その後に仙台市中学校の復興ソングを全校生徒で合唱し、代表生徒が誓いの言葉

	を述べている。復興ＤＶＤには大震災当時の災害や避難救助の様子、避難所や仮設住宅での生活、各中学校被災と中学生の奉仕活動等の写真映像が記録されている。また、震災後の各学校の防災教育の実践が写真で収録されており、これまで以下のサブタイトルが付記された三部作が制作され、ほぼ全ての中学校で活用されている。 第１集「ともに、前へ～過去から未来を創ろう、中学生の力で～」 第２集「ともに、前へ～支え合い、助け合い、未来を創ろう、中学生の力で～」 第３集「ともに、前へ～夢と希望があふれる未来を創ろう、中学生の力で～」 　そして、全校生徒が毎年、大震災への思いを新たにしている。 　以上のように、本校では生徒が体験的学習活動をすることで、未曾有の地震・津波に対する教訓を風化させることなく後の世代に受け継ぎ、地域の災害文化の構築の一助を担う実践活動として、重要な教育実践として位置づけ、継続している。
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	（１）集団避難訓練と集団下校訓練 　　人材：各地区役員の生徒　　道具、材料等：特になし （２）津波被災農家の講演 　　人材：津波被災農家の方々 　　道具、材料等：ＣＰ、プロジェクター、スクリーン （３）故郷復興プロジェクト 　　人材：生徒会役員が司会進行・運営 　　道具、材料等：ＣＰ、プロジェクター、スクリーン
参加人数	（１）：全校生徒約６００人　　（２）と（３）：１・２年生約４００人
経費の総額･内訳概要	０円
成果と課題	【成果】 ○津波被災者との交流を通じて、これまでの状況や心の変容、復興に向けた取組とその様子から、被災者の前に向かう意欲・姿勢を理解することにより、大震災の教訓を受け継ぎ、生徒自らが未来を切り拓き、生き抜く力の糧を学び取ることができる。 ○定期的な訓練を行うことで、自助と共助の術を身に付け、大震災の教訓として常日頃からの心構えと訓練がいかに必要かつ重要かを認識し、教訓を継承することができる。 ○毎年度末に各学校が独自の実施内容を創意・工夫して全校集会を開催することで、大震災の犠牲者を偲び、大震災の風化を防ぎ、教訓を受け継ぐことができる。 【課題】 ○避難訓練では、どの学年でも弱者に配慮などの思いやりが不足した結果となっており、弱者を助けたりする行動を取れていない課題が生じている。また、無駄話をしないで避難する調査からは、整列・人数確認を遅らせる結果となっており、逃げ遅れた生徒がいるか否

	かを、迅速に判断することに支障をきたすことに繋がっている。次回の訓練では解決すべき課題として、生徒一人一人が肝に銘じるよう反省をするとともに、弱者への配慮不足や無駄話をすることがどんな結果を生むかを、生徒一人一人が理解することが必要であると考える。
成果物	○アンケート集計・分析結果とその検証 ○被災者との心が通う交流と生き抜く力の糧の獲得

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：　ＮＯ．４　】※3

タイトル	防災教育の成果を外部発信
実施月日（曜日）	（1）ボランティア・スピリット賞　11 月 6 日（日）、12 月 23 日（金） （2）ユネスコスクール東北大会　　11 月 25 日（金） （3）大阪の中学校が来校して学校間交流　8 月 1 日（月） （4）防災教育チャレンジプラン中間報告 10 月 15 日（土）･16 日（日） 最終報告会　2 月 18 日（土）
実施場所	（1）11 月：札幌、12 月：東京　　（2）と（3）仙台　　（4）東京
担当者または講師	（1）～（3）担当者・講師等の区分：学校の代表生徒・生徒会役員 所属・役職等：前生徒会長（3 年生）、生徒会副会長（2 年生）など ※（2）では 2 年 5 組が合唱披露 （4）担当者：防災教育の関係教員 氏　名：安附和徳、相馬健一郎、三浦敏、若生知宏、高橋教義 役　職：教務主任、学力向上、防災主任、研究主任、校長
所要時間または「コマ数×単位時間」	（1）11 月の北海道・東北ブロックと 12 月全国表彰　各 10 分程度 （2）合唱と生徒会の学生か発表で約 40 分 （3）両校の学校の防災学習成果等の発表交流で約 2 時間 （4）防災教育の実践プランとその成果発表　10 分
プログラムのカテゴリ、形式※4	2（講習会・学習会）、 1 7（その他：校外に学習成果を発信・第三者評価）
活動目的※5	1 0（その他：本実践プランの改革・進化の企画構想）
達成目標	○生徒が主導する防災教育の実践とその学習成果を、生徒自らが外部に発信し、専門的な立場の有識者から第三者評価を受けて、実践と学習活動に新たな創意・工夫を取り入れて企画構想する。 ○本プランの実践成果等を生徒や教員が積極的に外部に発信し、被災地復興の支援を拡充し、他校等との防災教育の交流による実践プランの改革・進化を図る。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	**（1）ボランティア・スピリット賞にて成果発信** 「ボランティア・スピリット賞」は、米国最大級の金融サービス機関プルデンシャル・ファイナンシャルが 95 年からアメリカにて開始した青少年を対象としたボランティアを支援する制度である。現在ではアメリカ、日本、韓国、台湾、アイルランド、インド、中国、

ブラジルで表彰式が開催され、それぞれの国からボランティア大使が選出される。本校生徒の防災教育に関する奉仕活動が、北海道・東北ブロック賞に入賞し、ブロック大会で札幌、全国大会で東京にて代表生徒が成果を発表・発信している。

（２）ユネスコスクール東北大会にて成果発信

ユネスコスクール東北大会は、ユネスコスクールに加盟又は加盟申請した小・中・高の学校と大学等の関係機関が集い、ESD の教育成果の交流や情報共有などのために、毎年、宮城教育大学にて開催されている。本校では平成２７年度にユネスコスクール加盟の申請を行い、本大会にて平成２７年から２年生一クラスによる合唱披露と、生徒会による防災学習活動の実践発表を行っている。

そして、平成２８年度にはその成果が評価され、ESD ユネスコスクール実践大賞を受賞している。

【２年５組の生徒が合唱コンクールでの自由曲と仙台市復興ソングの２曲を合唱披露】

【生徒会が防災学習の取組と成果をプレゼン】

【学長から実践大賞を授与】

（３）大阪の中学校が来校してユネスコスクール間交流

ユネスコスクールに加盟している大阪市立鶴見橋中学校の代表生徒２人と教員２名が、平成２８年８月に来校し、本校生徒会２名と互いの学校紹介やＥＳＤの学習成果等について発表し合い、質疑を行った。本校の生徒からは東日本大震災の状況とその後の復興・復旧を含め、防災教育活動を中心に発表し、鶴見橋中学校からは学区

内や被災地でのボランティア活動と学校間の交流活動の成果などについて発表が行われた。その後、互いの学習活動において困難なことや課題について質疑を行い、それぞれの解決策等についての提案等が行われた。

（４）防災教育チャレンジプランにて本校教員が成果発表

本校は平成２８年度に内閣府等が主催している防災教育チャレンジプランに採択を受け、本年１０月に東京大学地震研究所を会場にして行われた中間報告会で実践成果を発表している。また、本校校長は分科会のパネラーとして本校の防災教育の在り方やその成果を述べると共に、参加者からの多彩な質疑に答えていた。

【会場：東京大学　地震研究所】

担当教員の実践成果の発表

校長の発表とパネルディスカッション

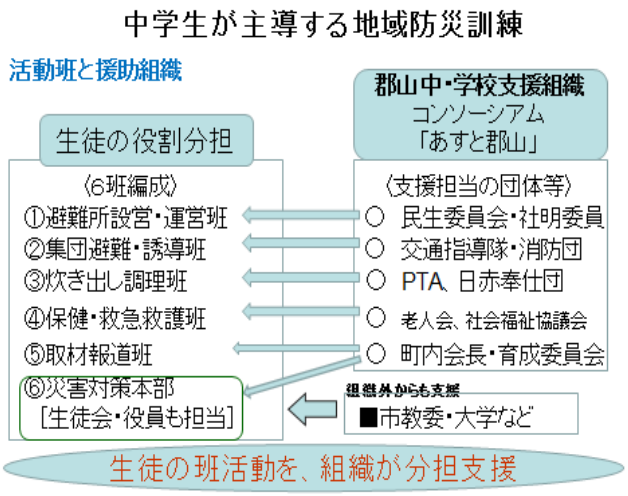
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	人材：本校の生徒や教員 道具、材料等：ＣＰ、プロジェクター、スクリーン、ピアノ 発表資料
参加人数	(1)ボランティア・スピリット賞　約２００人 (2)ユネスコスクール東北大会　約１５０人 (3)大阪の中学校が来校して学　８人 (4)防災教育チャレンジプラン中間報告会・最終報告会
経費の総額･内訳概要	０円　（各主催者から旅費の補助を受けているため）
成果と課題	【成果】 ○生徒が主導する防災教育の実践とその学習成果を、生徒自らが外部に発信できている。そして、本実践プランは専門的な立場の有識者から第三者評価を受け、実践成果の評価をいただいている。 ○本プランの実践成果等を、生徒や教員が積極的に外部に発信しており、今後、被災地の復興支援の拡充の可能性や、他校等との防災教育の交流による実践プランの改革・進化を図れることが期待できる。 【課題】 ○今後、第三者評価の結果に基づいて、生徒と教員が本実践プランをその実践方法と内容や学習活動に新たな創意・工夫を取り入れ

	て企画構想する。 ○本プランにおける被災地復興の取組を、他に周知することだけで支援の拡充が高まるとは限らないことから、他に積極的に呼びかけて支援の輪を広げる必要がある。 ○他校等との防災教育の交流にり、本プランに不足している“もの・こと・人”が明らかになったとしても、それが実践プランの改革・進化に繋げられるかがこれからの問題として残る。
成果物	○他校等の発表資料等の収集 ○人との交流による人的ネットワーク財産の構築 ○第三者評価による評価結果、さらにはそれ（発表の達成感と評価の喜び、受賞の感激）に伴う生徒の防災教育等の学習推進意欲の向上

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：　ＮＯ．５　】※3

タイトル	中学生が主導する地域防災訓練と防災教育：メインプラン
実施月日（曜日）	訓練実施日１１月１９日（土）、準備活動１０月～１１月１８日まで
実施場所	集団避難・防災訓練の会場：本校（体育館、校舎、校庭等）、 一次避難場所：東長町小学校、郡山小学校、八本松公園
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師、助言者 氏　　名：海野徳仁、　　高橋和之 所属・役職等：東北大学教授、仙台市教育委員会
所要時間または「コマ数×単位時間」	訓練日　８：１５～１６：５０ 準備活動期間　５０分×１０コマ
プログラムのカテゴリ、形式※4	２（講習会・学習会）、３（講演会・シンポジウム）、４（総合的な学習の時間）、１３（体験学習）、１６（避難・防災訓練）
活動目的※5	３（災害に強い地域をつくる）
達成目標	１、中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練を毎年行い、地域防災の力と意識を年々高め、防災・減災の知識とスキル、そして自助と共助の術を習得する。 このことにより、将来の地域防災を担う人材が育成され、毎年増員されることにより、確実に地域防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりに資する。 ２、学校・中学生が地域を巻き込む防災教育を実践展開し、住民と共に防災・減災に関する知識・スキル・態度を育み培う。そして、学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりを目指し、共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する。 ３、本プランの実践とその成果は、生徒や教員が積極的に外部発信し、被災地の復興支援と防災教育の拡充を図る。 ４、防災教育を通じて学校と地域が協働し、両者の絆を強め、希薄

	な人間関係等の地域が抱える課題の解決を図る。 ５、本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	**（１）地域防災訓練の概要** 本実践は平成２７年度から郡山中学校区の小学校と中学校、町内会、消防団・消防署、ＰＴＡ等からなる『郡山中・学校支援組織　コンソーシアム「あすと郡山」』が協働して地域防災訓練を行っている。 中学生は右図に示す６班を分担し、本支援組織の町内会等の地域組織が生徒の各班をサポートしている。  平成２７年度は中学３年生のみ平成２８年度は中学３年生と２年生の一部生徒が６班を分担し、各班活動を主導して訓練を実行している。避難者役は中学１・２年生、小学生、住民、保護者等であり、町内会や消防団等の多様な地域組織の援助を受けて、地域を巻き込む取組展開を図っている。 **○実施日時**　平成２７年１１月２１日（土）８：１５～１６：３０ 平成２８年１１月１９日（土）８：１５～１６：３０ **○実施形態**　授業日として全校生徒が参加 **○平成２８年度の参加者** 小学生・職員：郡山小学校２１５人・１６人 中学生・職員：郡山中学校５８４人・４２人 保護者：４６人 避難者役の地域住民：郡山小学校区の住民１１２人、 中学校近隣町内会の住民１０４人 その他地区住民４６人 **〈　総参加者数１，１６５人　：平成２７年度とほぼ同数〉** **○実施概要**　以下の表に示す実施概要は、平成２８年度に行った内容である。各小学校（郡山小学校、東長町小学校）と公園（八本松公園）の一次避難所には各地区所属の小・中学生や住民、保護者等が避難者として参加した。

時　刻	所属／内容	郡中３年＋２年一部	中１年生と２年生の一部生徒・地域住民・保護者		
			東長町小・出身	八本松小・出身	郡山小・出身
8:15	避難場所・学校に集合	郡山中学校に登校(クラスごとに出席確認後、班活動を開始)	〈各地の一時避難所に集合〉→〈各集団避難所に移動〉		
			東長町小学校	八本松公園	郡山中学校
9:00	支援活動の内容 ９：００～受付開始	A避難所の開設と運営 B炊き出し調理 C取材報道活動：撮影等 D救急救護の活動支援 F会場内の誘導・案内 K災害対策本部の支援 I集団避難誘導　など	○郡山連合町内会の避難訓練に参加 ○町内会の行事終了後、中学校へ集団避難移動(担当生徒が集団避難誘導) 避難所の郡中・体育館にて出席確認・待機	○担当生徒が集団避難誘導 ○交通安全協会の支援を受けて移動	○一時避難所から郡山中に集団避難・点呼 ○郡山中で避難終了式(～9:30) ○児童は郡山小へ集団移動訓練
	備蓄物資の見学	集団避難完了後、中学校に備えられている備蓄物資展示の見学			
9:30 10:45 12:00	9:30～12:00 防災・減災のコース学習	【　開始時刻　①9:30、②10:45　】コースAとBは、抱き合わせて見学 コースＡ：消防署による梯子車等の装備見学と実演体験、煙霧体験、応急措置 コースＢ：中学生による備蓄物資と食材の展示・説明 コースＣ：国交省・東北整備局による講演：本校学区の治水対策の現状と課題 演題「名取川の水害の歴史と河川管理について」			
12:00 13:00	炊き出し調理試食 〈学習成果発表〉	○炊き出し調理班が調理し、配給班が炊き出しを配給・片付け ○生徒と教員・Ｐ、整理券を持つ保護者と住民８００人に配給 試食時に〈生徒会による防災学習成果の発表、防災学習スライドショーを上映〉			
13:15 14:45	防災教育シンポジウム ※司会・進行等の運営は生徒会	１、開　会：生徒会・新会長　　２、挨拶と講師紹介：校長 ３、講　演：演題「大震災から何を学ぶのか？～災害から命を守るために～」 講師　東北大学リーディング大学院特任教授　海野　徳仁　氏 理学研究科　地震・噴火予知研究観測センター　前センター長			
15 休憩		〈　休憩１５分　〉			
15:00 16:00		４、班活動と取材報道班の報告：班ごとの活動成果、取材報告 ５、講　評：東北大学、仙台市教育委員会 ６、閉会の挨拶：生徒会・旧会長　　７、閉　会：生徒会・副会長			

（２）生徒が主導する訓練概要【各班活動の様子】

生徒が主導して取り組んだ地域防災訓練において、各班の活動の様子を以下に示す。

A　避難所の開設と運営

避難所の受付を生徒が担当

避難所を運営する生徒の様子

B　炊き出し調理と配給（カレーと豚汁を調理して配給）

Ｂ－１、炊き出し調理班

Ｂ－２、炊き出し配給班

生徒がカレーと豚汁の炊き出しを、８００食を調理・配給

C　救急救護の活動支援

救急救護班が救護ブースを設置し、包帯による止血処置訓練や、心肺蘇生訓練人体模型を利用して心配蘇生訓練を披露している。

D　取材活動

取材報道班が訓練の様子を撮影し、避難者や支援者への取材を行い、午後に開催されるシンポジウムで取材報告をプレゼンしている。さらに、号外チラシを作成して参加者に配布もしている。

E　災害対策本部の支援活動

本部には生徒会役員、町内会長、区役所、育成委員、青少年指導委員などが参集している。本部は、生徒会から各班などの進捗状況の報告を受け、必要に応じて助言や指示を生徒会に伝える。生徒会は各班等に助言や指示を伝えることになる。

F　仮設トイレを組立展示し、備蓄物資・食材の展示と説明

G　集団避難と誘導

（３）コース別学習の概要

①平成２７年度の３コース別学習

・消防団の仕事説明（コースＡ）、
・備蓄物資の展示・説明（コースＢ：写真は上記のF）、
・生徒会による防災学習成果と女川視察支援の報告プレゼン（コースＣ）

中学生や地域住民の方々は、本校卒業生である消防団員による消防団の仕事や装備の説明を聞き、感激している。また、本校の避難所には備蓄物資として何が、どれ位の備蓄がされているか、そして仮設トイレ等の説明を担当班の生徒から聞き、知ら

なかったことに驚いている。さらに、本校生徒が女川を支援し、防災教育で何を学習してその成果として何が得られたのかを熱心に聞き入っている。

【生徒会が防災学習の成果報告、被災地の女川の視察支援の報告】

②平成２８年度のコース別学習

【コースＡ】消防署による梯子車等の特殊車両の展示・実演と煙霧体験、応急措置の救護演習

梯子車、特殊装備車とその備品、消防車、救急車を本校敷地内にて展示し、説明をいただいた。

また、本校４階の非常階段から、代表生徒を梯子車で救助する実演も披露していただいた。

空き教室を使用して煙霧体験の指導を受け、煙の中では低い姿勢で避難することの大切さ体験から学んだ。また、骨折等の怪我の応急措置では、どの家庭にもあるラップが役立つことを教えていただき、実際に参加者がラップを使って応急措置の訓練を行った。

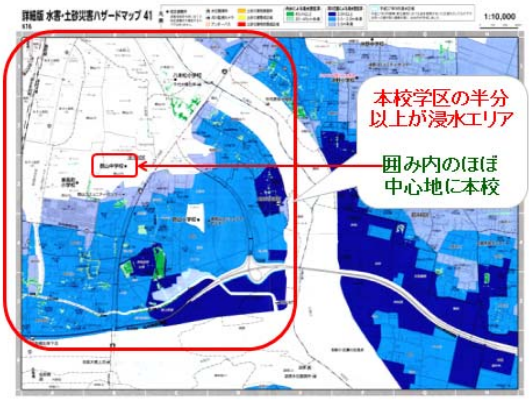
煙霧体験では、教室に入る前の廊下まで煙が充満

【コースＢ】生徒による活動班：備蓄物資の展示・説明班が担当

前項Ｐ２３のＦに示したように、仮設トイレを組立展示し、備蓄物資・食材の展示と説明

【コースＣ】国交省・仙台河川国道事務所による講演「名取川の洪水の歴史と河川管理について」

本校学区域は一級河川の名取川と広瀬川に囲まれており、洪水が起こると右図のハザードマップが示すように、ほぼ三分の二のエリアが浸水する。



このため、本校学区内の住民は治水対策に関心が高いことから、防災教育として生徒も住民も熱心に興味深く、洪水の歴史と河川管理の講話に聞き入っていた。

（４）郡山小学校区の小・中学生と住民や行政、小学校教員が中学校へ集団避難

要援護者宅の確認後に、各地区の一時避難場所に集合し、その後に集団避難訓練を中学校の校庭まで実施している。

避難者は幼児、小・中学生、高齢者を含む住民、小学校の教員や行政、交通指導隊・消防団など、多様な地域住民が訓練に参加している。

郡山小学校区の地域は、上記のハザードマップで青色の地域であり、水害に対する関心が高いと共に、訓練などの防災に熱心に取り組んでいる地域でもある。

（５）多様な団体や機関等による支援と準備援助訓練などの様子

本実践プランでは、ＰＴＡをはじめ婦人防火クラブなど地域組織からの支援や援助に止まらず、以下のような財団などの助成等を受けて実施しており、その主なものを示す。

①公益財団法人 JKA「新世紀未来創造プロジェクト」採択により炊き出し用の調理器材を整備

本財団からはガスコンロ一式と寸胴鍋、大鍋等の備品の整備を受け、プロパンガス・ボンベとコンロへの接続や整備・点検を地元の燃料店が援助していただいている。

②みやぎ生協が食材物資を搬入

【災害時における“みやぎ生協”と“学校”の連携訓練】

訓練時から生協が本校の防災訓練を支援していただいており、実際に震災等が発生した際においても、学校と生協が連携して避難者への炊き出しを行う。

③本校の保護者が炊き出し（豚汁）調理を支援

本校ＰＴＡは炊き出しを担う担当支援組織を設け、組織的に訓練から支援援助をいただいている。

以上のように、中学生が主導する地域防災訓練では、多様な団体等から助成や支援を受け、さらには地域の人的・物的教育資源の支援のもと、年々、教育実践を拡充・充実を図っている。中学生が主役で訓練を主導し、中学生が地域貢献活動に尽力している。この取

組では中学生が地域住民との関わりと繋がりが醸成されるとともに、中学生は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へと心と姿勢を変容させている。

（６）生徒会が司会・運営する防災教育シンポジウム

【平成２７年度】

①東北大学・呉助教授の講演　**演題「水害・異常気象 のメカニズムと、その予知研究の現状と未来」**と生徒との質疑・応答

②各班による活動成果の報告

③大学教官による訓練の講評

【平成２８年度】

①　東北大学･海野教授の講演　演題「**大震災から何を学ぶのか？～災害から命を守るために～**」と生徒との質疑・応答

②活動取材班が各班活動の紹介と取材報告をプレゼン

③市教委による訓練の講評

平成２８年度には熊本や鳥取において活断層による地震が発生している。本校学区の近くには長町利府・活断層があることが知られており、地震学者による活断層も含めた講演は、地域住

民にとって関心事として反響が大きかった。

④生徒会が閉会のあいさつ

生徒会副会長は、訓練の成果等を含め、これからの防災学習について意欲を述べると共に、地域の防災・減災に中学生の力を活かしていこうと決意を表明している。

（７）アンケート調査結果と分析

中学生が主導する地域防災訓練が終了後、中学生と地域住民を対象に、１７の質問項目からなる４件尺度法（選択肢：大いに、まあまあ、あまり、ぜんぜん）によるアンケート調査を行った。右記に集計結果を表に示し、その考察した結果を述べる。表中には、選択肢“大いに”が８割を超えた場合に赤字、選択肢“大いに”の割合が前年度より大会場合にピンクの塗りつぶしで示している。

①両年度ともに全ての項目において、選択肢“大いに”と“まあまあ”を加えた割合は８割を超え、全調査対象者が本訓練の成果や効

NO	質問内容	選択肢	調査年度	調査対象者 1年	2年	3年	住民
1	地域だけで行う防災訓練とくらべて、学校と地域が一緒になって防災訓練を行うことは必要である。	大いに	H27	72.5	77.5	80.4	86.4
			H28	83.3	78.3	90.9	68.0
		まあまあ	H27	22.5	20.1	17.6	13.6
			H28	15.0	17.8	6.9	32.0
2	中学生が中心になって地域防災訓練を実施することにより、中学生は地域防災に貢献できると思う。	大いに	H27	62.1	78.2	78.6	81.8
			H28	81.0	75.3	92.0	65.4
		まあまあ	H27	32.8	18.2	18.4	18.2
			H28	19.0	20.3	6.8	34.6
3	本日の地域防災訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる。	大いに	H27	65.0	67.9	72.9	66.7
			H28	78.1	56.4	82.2	52.2
		まあまあ	H27	31.6	28.6	23.1	26.2
			H28	21.9	37.8	14.9	43.5
4	実際に大きな地震が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う。	大いに	H27	76.8	72.5	79.2	74.4
			H28	85.4	75.6	88.5	69.2
		まあまあ	H27	18.6	25.7	19.8	18.6
			H28	12.9	18.6	9.2	30.8
5	中学生が中心になって行う地域防災訓練は、毎年、実施する必要があると考える。	大いに	H27	44.3	38.7	55.3	62.8
			H28	59.2	54.5	74.1	65.4
		まあまあ	H27	42.0	44.0	32.7	34.9
			H28	33.5	34.6	20.1	30.8
6	中学生や学校が、地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる。	大いに	H27	76.8	77.4	77.9	77.3
			H28	85.5	71.8	90.2	84.0
		まあまあ	H27	19.8	19.0	20.6	22.7
			H28	14.0	25.0	9.2	16.0
7	地域や学校が一緒になって、様々な活動や取組を実施することは、地域の活性化につながると感じる。	大いに	H27	61.6	64.9	67.8	81.8
			H28	64.8	52.6	83.3	72.0
		まあまあ	H27	32.2	33.9	27.1	18.2
			H28	34.6	40.4	14.9	28.0
8	本日のような行事は、地域の皆さんと中学生の関わりが深まると感じる。	大いに	H27	53.4	58.3	64.8	67.4
			H28	62.6	47.4	75.3	68.0
		まあまあ	H27	36.9	35.7	27.1	27.9
			H28	30.7	36.5	19.5	24.0
9	地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる。	大いに	H27	72.0	78.4	83.9	90.9
			H28	84.8	69.7	89.1	87.5
		まあまあ	H27	22.9	19.8	14.6	9.1
			H28	14.0	27.1	9.8	12.5
10	備蓄物資見学や消防署・消防団の講話、防災学習のプレゼン発表では、学ぶことや知ることができた。	大いに	H27	66.9	62.5	60.3	57.7
			H28	74.7	57.0	76.5	57.9
		まあまあ	H27	25.8	32.4	35.1	42.3
			H28	24.7	39.7	21.0	36.8

11	自分の力が人のために役になって、うれしいと思う。	大いに	H27	58.2	56.5	69.3	
			H28	65.4	54.2	79.3	
		まあまあ	H27	33.9	36.9	25.6	
			H28	30.7	37.4	18.4	
12	これからも、人のために役に立ちたいと思う。	大いに	H27	68.4	69.0	76.3	
			H28	74.3	62.8	86.8	
		まあまあ	H27	26.0	27.4	21.2	
			H28	24.6	31.4	13.2	
13	人が人を助けることは、大切なことだと感じた。	大いに	H27	79.7	83.3	84.3	
			H28	92.1	78.2	93.1	
		まあまあ	H27	15.8	16.1	14.1	
			H28	7.3	17.9	6.9	
14	自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う。	大いに	H27	72.3	79.6	79.9	
			H28	88.3	68.4	88.5	
		まあまあ	H27	23.2	19.8	17.6	
			H28	10.6	27.7	10.9	
15	自分にできることを探し続け、チャレンジしたいと思う。	大いに	H27	57.4	63.7	65.3	
			H28	68.7	49.7	77.0	
		まあまあ	H27	35.2	32.7	29.1	
			H28	28.5	40.4	21.8	
16	どんな苦難にも立ち向かい、苦難を乗り越える努力をしていきたい。	大いに	H27	59.3	60.7	68.8	
			H28	67.0	55.8	81.0	
		まあまあ	H27	31.6	35.1	28.6	
			H28	31.8	34.6	17.2	
17	自分の夢や希望を持ち続け、頑張りたいと思う。	大いに	H27	71.0	76.8	79.9	
			H28	81.6	65.4	82.2	
		まあまあ	H27	23.3	20.8	18.6	
			H28	17.3	28.2	16.1	

果を高く評価していることが分かる。

②NO5「中学生が中心になって行う地域防災訓練は、毎年、実施する必要があると考える。」では全ての調査対象者が前年度を上回り、中学生主導の訓練の必要性が高まっている。

③１年生と３年生は、選択肢“大いに”の割合が全ての項目で前年度を上回っている。１年生は初めての避難者役としての体験的学習に学びの成果を体感し、３年生は訓練の実行役として学びによりその充実感と達成感を抱いたものと考えられる。２年生は前年度に避難者役を経験しており、このために選択肢“大いに”だけに着目すると前年度を若干下回る項目が多かったものの、選択肢“まあまあ”を加えると８割を超えており学びの成果と効果は高いものと考えられる。

④住民対象の１０項目の調査において、選択肢“大いに”が前年度より上回った項目は、②で述べた NO5、NO6「中学生や学校が、地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる。」と NO8「本日のような行事は、地域の皆さんと中学生の関わりが深まると感じる。」であり、中学生主導の訓練や学校と地域の協力の必要性が高まり、そして住民と中学生との関わりが深化することが分かる。また、住民は NO9「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる。」で両年とも選択肢“大いに”が９割程度を占め、防災教育の重要性を高く認識できたことが分かる。このことは、本教育実践は中学生の地域貢献と地域の活性化につながり、住民との関わりを深める効果と成果を得られることが確かめられる。

⑤さらに、本教育実践が生徒の心的影響とその効果を問う項目 NO11～NO17 についてみてみると、いずれの項目においても選択肢「大いに」と「まあまあ」を加えると、全ての項目で９割を超え

ている。このことは、本教育実践が生徒に NO11「自分の力が人のために役になって嬉しい」、NO12「これからも人のために役に立ちたい」、NO13「人が人を助けることは大切」、NO14「自分は人を助け、支え合いたい」、NO15「自分にできることを探し続け、チャレンジしたい」、NO16「どんな苦難にも立ち向かい、苦難を乗り越える努力をしたい」、NO17「自分の夢や希望を持ち続け、頑張りたい」いずれにおいても良好な心的影響をもたらす成果と効果があり、道徳心と自己肯定感・効力感を高めることが確かめられる。このように、本教育実践は学校と地域が合同で防災教育を行うことで、その必要性と重要性を確かめられるとともに、中学生に対する心理的効果や教育的成果に多大なる波及・寄与することができる。

次ぎに、各項目間の相関分析を行い、相関値が 0.4～0.7 の“相関あり”と 0.7 以上の“強い相関あり”を検証してみる。以下に示した相関表では、0.7 以上の強い相関を黄色、0.6 以上で 0.7 未満をピンク、0.5 以上で 0.6 未満を水色、0.4 以上で 0.5 未満を薄緑で、色分けして表示している。

H28 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第1学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.25	0.35	0.41	0.43	0.48	0.28	0.36	0.32	0.12	0.23	0.29	0.37	0.30	0.19	0.18	0.14
NO2			0.26	0.29	0.13	0.3	0.2	0.23	0.19	0.17	0.16	0.28	0.30	0.16	0.28	0.33	0.16
NO3				0.39	0.43	0.33	0.3	0.29	0.16	0.32	0.39	0.45	0.26	0.36	0.32	0.29	0.15
NO4					0.36	0.18	0.15	0.23	0.32	0.17	0.13	0.11	0.09	0.17	0.21	0.22	0.09
NO5						0.5	0.23	0.26	0.33	0.15	0.38	0.37	0.30	0.28	0.28	0.24	0.28
NO6							0.22	0.3	0.36	0.20	0.28	0.34	0.42	0.42	0.24	0.26	0.28
NO7								0.31	0.27	0.25	0.23	0.24	0.11	0.15	0.37	0.30	0.08
NO8									0.29	0.09	0.25	0.49	0.21	0.17	0.19	0.13	-0.04
NO9										0.37	0.21	0.23	0.25	0.14	0.27	0.15	0.16
NO10											0.31	0.27	0.19	0.26	0.40	0.26	0.19
NO11												0.70	0.42	0.42	0.44	0.37	0.29
NO12													0.56	0.66	0.45	0.51	0.35
NO13														0.61	0.33	0.28	0.43
NO14															0.44	0.41	0.44
NO15																0.60	0.39
NO16																	0.41
NO17																	

右記の相関表から、１年生は NO11「自分の力が人のために役になって、うれしいと思う。」と NO12「これからも、人のために役に立ちたいと思う。」との間で強い相関を示している。このことから、１年生は人のために役立つことが喜びに繋がることで、これからも人のために役立ちたいと願っていることが分かる。

２年生は、昨年１年生の相関表と比較し、次のことが H28 年の相関表により確認できる。NO12「これからも、人のために役に立ちたいと思う。」は他の全項目と相関があり、特に NO13「人が人を助けることは、大切なことだと感じた。」や NO14「自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う。」とは強い相関を示して

H27 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第1学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.49	0.48	0.3	0.58	0.55	0.49	0.46	0.522	0.41	0.47	0.41	0.43	0.44	0.41	0.44	0.4
NO2			0.38	0.28	0.38	0.48	0.61	0.52	0.422	0.36	0.52	0.51	0.53	0.49	0.47	0.49	0.43
NO3				0.42	0.5	0.65	0.45	0.5	0.485	0.37	0.44	0.49	0.48	0.52	0.45	0.49	0.5
NO4					0.32	0.39	0.34	0.36	0.35	0.29	0.27	0.36	0.36	0.32	0.25	0.23	0.18
NO5						0.56	0.44	0.51	0.487	0.36	0.4	0.39	0.32	0.34	0.37	0.4	0.34
NO6							0.61	0.51	0.557	0.39	0.49	0.55	0.51	0.47	0.46	0.51	0.5
NO7								0.56	0.503	0.37	0.53	0.56	0.53	0.41	0.48	0.5	0.47
NO8									0.503	0.5	0.55	0.54	0.46	0.52	0.49	0.51	0.47
NO9										0.57	0.43	0.5	0.48	0.52	0.4	0.43	0.43
NO10											0.41	0.39	0.43	0.45	0.35	0.32	0.4
NO11												0.74	0.55	0.54	0.54	0.6	0.58
NO12													0.71	0.69	0.55	0.64	0.64
NO13														0.65	0.53	0.54	0.69
NO14															0.52	0.57	0.67
NO15																0.67	0.54
NO16																	0.65
NO17																	

H28 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第2学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.57	0.54	0.48	0.55	0.45	0.37	0.31	0.45	0.42	0.42	0.41	0.40	0.40	0.30	0.30	0.26
NO2			0.51	0.56	0.54	0.64	0.43	0.39	0.52	0.39	0.47	0.50	0.60	0.47	0.48	0.36	0.30
NO3				0.53	0.58	0.60	0.45	0.39	0.51	0.36	0.47	0.44	0.41	0.42	0.41	0.42	0.28
NO4					0.53	0.49	0.44	0.42	0.56	0.34	0.54	0.54	0.64	0.46	0.51	0.38	0.33
NO5						0.61	0.50	0.37	0.70	0.38	0.52	0.51	0.49	0.44	0.52	0.44	0.31
NO6							0.46	0.28	0.58	0.37	0.50	0.51	0.53	0.56	0.49	0.47	0.45
NO7								0.54	0.47	0.31	0.38	0.46	0.44	0.39	0.44	0.39	0.36
NO8									0.37	0.31	0.32	0.49	0.45	0.39	0.34	0.40	0.39
NO9										0.34	0.54	0.56	0.56	0.49	0.51	0.45	0.39
NO10											0.39	0.40	0.37	0.38	0.37	0.27	0.32
NO11												0.69	0.54	0.65	0.59	0.51	0.47
NO12													0.72	0.72	0.65	0.60	0.62
NO13														0.75	0.59	0.51	0.52
NO14															0.54	0.61	0.63
NO15																0.68	0.58
NO16																	0.62
NO17																	

いる。また、NO5「中学生が中心になって行う地域防災訓練は、毎年、実施する必要があると考える。」と NO9「地域防災訓練などの防災教育は、大切だと感じる。」、NO13 と NO14 との間にも強い相

関を示している。このように。２年生は今後とも人のために役立ちたいと思う気持ちが、いろいろな機会や場面に波及・寄与していることが分かる。特に、人を助けることは重要であり、人と支え合うことに繋がるものと認識している。また、中学生主導の地域防災訓練を継続することが必要であり、防災教育では重要であると認知している。

３年生は H27 年と比較して H28 年には NO3「本日の地域防災訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる。」、NO6「中学生や学校が、地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる。」、N014「自分は人を助けたり、人と支え合ったりしていきたいと思う。」が他の全ての項目と相関を示している。さらには、H27 より相関を示す項目間が増え、相関値も高まっている。このことから、３年生は地域防災訓練を実行役として実施することにより、学びの満足感や充実感を拡充し、中学生と学校や地域が協働することの必要性を高め、人と助け支え合う心の育成につながっているものと考えられる。また、強い相関を示した項目間を見てみると、NO1「地域だけで行う防災訓練とくらべて、学校と地域が一緒になって防災訓練を行うことは必要である。」と NO5「中学生が中心になって行う地域防災訓練は、毎年、実施する必要があると考える。」、さらに NO1 は NO6「中学生や学校が、地域防災訓練を行ったり、協力したりすることは必要と感じる。」とも強い相関を示した。また NO3「本日の地域防災訓練で活動・体験して、良かった・ためになったと感じる。」と NO5、さらに NO5 と NO6 との間でも強い相関関係にあることからも、学校と地域が協働することや、中学生主導の訓練を継続実施することの必要性も認知し、自らの学びや喜びにも繋がる実践であると考えていることが分かる。

H27 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第2学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.533	0.53	0.39	0.353	0.69	0.475	0.448	0.48	0.346	0.481	0.54	0.365	0.413	0.42	0.62	0.309
NO2			0.424	0.33	0.372	0.52	0.318	0.412	0.48	0.192	0.499	0.5	0.244	0.271	0.34	0.48	0.188
NO3				0.398	0.293	0.55	0.541	0.456	0.49	0.35	0.529	0.48	0.357	0.384	0.49	0.55	0.35
NO4					0.181	0.35	0.292	0.263	0.38	0.191	0.417	0.32	0.419	0.314	0.15	0.4	0.262
NO5						0.49	0.252	0.271	0.33	0.287	0.313	0.29	0.235	0.14	0.23	0.19	0.249
NO6							0.415	0.378	0.55	0.44	0.55	0.47	0.332	0.349	0.38	0.54	0.374
NO7								0.622	0.35	0.334	0.4	0.45	0.437	0.355	0.54	0.51	0.395
NO8									0.46	0.37	0.402	0.46	0.395	0.418	0.51	0.54	0.454
NO9										0.404	0.495	0.46	0.368	0.371	0.34	0.43	0.422
NO10											0.249	0.37	0.396	0.387	0.35	0.36	0.401
NO11												0.68	0.5	0.365	0.41	0.52	0.327
NO12													0.632	0.473	0.5	0.52	0.323
NO13														0.538	0.37	0.38	0.452
NO14															0.46	0.48	0.556
NO15																0.67	0.496
NO16																	0.587
NO17																	

H28 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【第3学年】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16	NO17
NO1		0.51	0.64	0.63	0.72	0.71	0.39	0.49	0.62	0.33	0.47	0.37	0.62	0.53	0.37	0.45	0.54
NO2			0.48	0.35	0.58	0.54	0.26	0.39	0.54	0.44	0.40	0.36	0.46	0.43	0.29	0.42	0.34
NO3				0.65	0.73	0.69	0.49	0.60	0.56	0.47	0.53	0.51	0.52	0.56	0.51	0.60	0.54
NO4					0.64	0.58	0.40	0.53	0.58	0.27	0.34	0.35	0.40	0.42	0.27	0.33	0.39
NO5						0.70	0.47	0.56	0.58	0.30	0.39	0.39	0.48	0.49	0.38	0.40	0.46
NO6							0.49	0.48	0.49	0.42	0.45	0.56	0.62	0.61	0.47	0.50	0.44
NO7								0.65	0.38	0.24	0.34	0.37	0.36	0.41	0.34	0.34	0.26
NO8									0.52	0.39	0.42	0.39	0.39	0.51	0.44	0.46	0.42
NO9										0.32	0.45	0.48	0.48	0.49	0.33	0.40	0.41
NO10											0.55	0.50	0.34	0.50	0.57	0.64	0.35
NO11												0.65	0.45	0.62	0.53	0.55	0.52
NO12													0.56	0.65	0.48	0.44	0.39
NO13														0.57	0.43	0.38	0.53
NO14															0.66	0.51	0.60
NO15																0.69	0.57
NO16																	0.56
NO17																	

住民においては、H27 年と比較して強い相関を示す項目間が減っているものの、H28 年度においては次のような相関分析の結果を示している。住民は NO4「実際に大きな地震が起きた場合、地域防災訓練は役立つと思う。」と NO7「地域や学校が一緒になって、様々な活動や取組を実施することは、地域の活性化につながると感じる。」との間で強い相関になっている。このことから、住民は本教育実践により地域と学校が協働する活動や取組により地域の活性化をもたらすと共に、災害や有事の際にはその成果を発揮するものと認

識している。

H27 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【地域住民】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16
NO1		0.81	0.67	0.06	-0	0.12	0.46	0.57	0.67	0.56	0.335	0.62	0.38	0.42	0.43	0.501
NO2			0.5	-0	0.12	0.12	0.46	0.42	0.5	0.56	0.335	0.45	0.31	0.42	0.31	0.373
NO3				0.12	0.25	0.24	0.32	0.45	0.39	0.63	0.261	0.34	0.31	0.28	0.51	0.481
NO4					0.17	0.4	0.32	0.5	0.27	0.4	0.443	0.5	0.58	0.43	0.56	0.35
NO5						0.6	0.28	0.09	0.02	0.266	-0.06	0	0.17	-0.1	0.05	0.029
NO6							0.35	0.29	0.04	0.325	0.093	0.19	0.46	0.3	0.25	0.084
NO7								0.73	0.54	0.459	0.362	0.5	0.72	0.6	0.42	0.364
NO8									0.59	0.565	0.583	0.66	0.6	0.5	0.44	0.64
NO9										0.525	0.671	0.86	0.8	0.57	0.51	0.595
NO10											0.492	0.46	0.58	0.52	0.57	0.611
NO11												0.62	0.65	0.5	0.34	0.399
NO12													0.7	0.45	0.42	0.506
NO13														0.71	0.77	0.543
NO14															0.67	0.441
NO15																0.633
NO16																

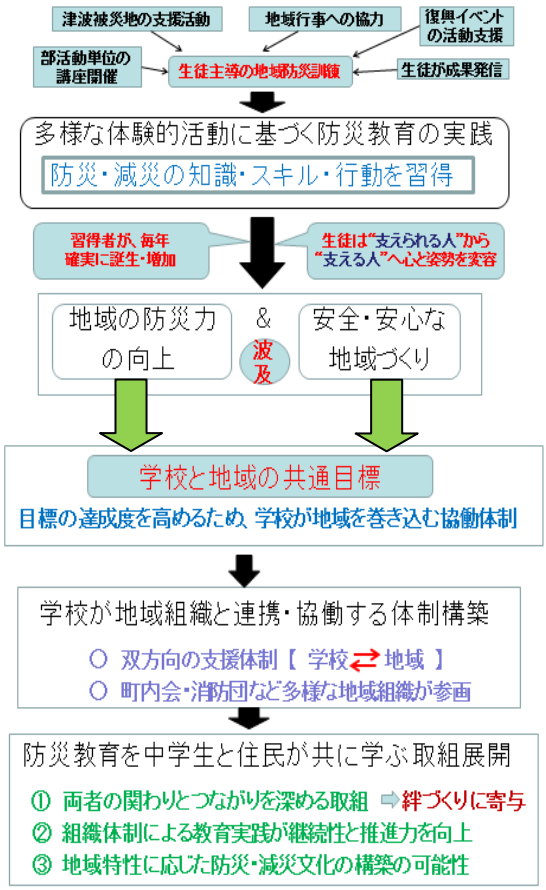
H28 地域防災訓練アンケート調査・相関分析【地域住民】

	NO1	NO2	NO3	NO4	NO5	NO6	NO7	NO8	NO9	NO10	NO11	NO12	NO13	NO14	NO15	NO16
NO1		0.43	0.11	0.25	0.27	0.11	0.05	-0.13	-0.17	-0.18	0.34	-0.14	0.04	0.30	0.21	0.31
NO2			0.45	0.29	0.23	0.08	0.27	0.20	0.05	0.20	0.02	0.40	0.08	0.41	0.46	0.49
NO3				0.06	0.2	0.39	0.08	0.40	0.53	0.52	0.53	0.28	0.51	0.53	0.47	0.42
NO4					0.15	-0.2	0.83	0.31	0.05	0.03	0.26	0.40	0.31	0.53	0.17	0.15
NO5						0.21	0.02	-0.16	-0.06	0.09	0.26	0.38	0.28	0.36	0.09	-0.21
NO6							-0.2	0.21	0.21	0.17	0.59	0.01	0.05	0.33	0.29	0.19
NO7								0.46	0.19	0.22	0.20	0.43	0.35	0.55	0.27	0.25
NO8									0.46	0.24	0.51	0.18	0.26	0.46	0.47	0.27
NO9										0.59	0.36	0.34	0.43	0.46	0.43	0.50
NO10											0.15	0.38	0.50	0.43	0.14	0.56
NO11												0.03	0.40	0.66	0.27	0.20
NO12													0.52	0.10	0.13	0.03
NO13														0.22	0.14	0.24
NO14															0.31	0.60
NO15																0.38
NO16																

（８）おわりに

東北地方にはこれまでＭ７クラスの宮城県沖地震が平均で約３７年周期に発生していたものの、2011 年３月 11 日の東日本大震災はＭ９の誰もが経験したことがない、想定外の未曾有の大惨事を発生させた。

何度も宮城県沖地震を経験している仙台市立の学校では、全ての校舎の耐震化工事が完了し、避難訓練等の安全教育が続けられていた。しかし大震災後、全ての生徒が自らの命を自ら守り、生き抜く力の糧を学ぶためには、これまで行ってきた教育では限界を感じざるを得ず、大震災で得た教訓を生かした新たな防災教育の創出を図り、その実践を試みることが必要かつ重要である。



そこで本教育実践では以下を目指す。

①防災・減災の知識とスキル、そして行動と防災対応能力を育む。

→　地域の防災意識と防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりを担う。

②“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ、心と姿勢の変容を図る。

→　生徒自らが実行役として防災・減災に取り組み、豊かな心と

	人間性を培う。 ③大震災がもたらした現実を知り、教訓を学び継承する。 →　主体的に復興支援に取り組み、持続可能な社会づくりを担う人材を育む。 以上、本校の防災教育では保護者や地域を組織的に巻き込む仕組みを構築しつつ、学校・地域支援組織の設立を進めている。上記の図に示したように、中学生が主導する地域防災訓練をメインプランに、多様な体験的活動に基づく防災教育の実践を創出している。これらの実践により、生徒は防災や減災の知識・スキル・行動と防災対応能力を習得する。毎年、習得者が地域に増員され、確実に住民の防災意識と地域防災力は高まる。また、実践を通じて生徒は“支えられる人”から“支える人”へ心と姿勢を変容し、豊かな人間性を育むことができる。そして、実践が継続することで、地域の様々な年代の人々と関わり、繋がり、延いては絆づくりに寄与し、心が通い合う安全・安心な地域づくりに波及し、持続可能な地域コミュニティの形成が期待できる。 本校の実践は汎用性、継続性、有効性、発展性において、防災教育の実践として評価できるものと考える。しかし、今後、実践を継続しながら、さらに分析と検証を重ねて改善と改良を行っていく。そして、現在から未来に向け、本実践による防災教育を継続することは、地域防災力が偉大なる力(共助という、地域の人と人が結びつく強靭な絆を司るパワー)に進化するものと確信している。
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	【人材】 ・東北大学教授、宮城教育大学、仙台市教育委員会、亘理町商工観光課・農林水産課、仙台市農業園芸センター、太白区消防署、仙台市行政(市役所・区役所)、交番所 ・町内会、民生委員児童委員、社会福祉協議会、日本赤十字、婦人防火クラブ、交通指導隊、消防団、老人会、PTA、本校学区健全育成協議会、親父の会 ・公益財団法人ＪＫＡ・日本ユネスコ協会連盟・ちゅうでん教育振興財団、(株)荒浜アグリパートナーズ、みやぎ生協、地元燃料店とホームセンターなど 【道具、材料等】 ・炊き出し調理：ガスコンロ一式、ガスボンベ、寸胴鍋、大鍋等 カレー・豚汁の食材 ・本校備蓄物資：仮設トイレ、プライベートルーム、テレビ、 毛布、 ・展示実演：消防署の梯子車・特殊装備車・救急車 心肺蘇生訓練人形、など
参加人数	小学生２１５、中学生５８４、教職員５８、保護者４６人以上 学区内住民２１６、他地区住民４６　　総計１，１６５人以上
経費の総額･内訳概要	炊き出し食材費：　　１８３，０９６円 消耗品費：　　１３６，９１１円 ガスボンベ・ガス料金等：２６，０２８円

成果と課題	【成果】 1、中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練を毎年行い、地域防災の力と意識を年々高め、防災・減災の知識やスキルと防災対応能力を育み、そして自助と共助の術を習得できる。 このことにより、将来の地域防災を担う人材が育成され、毎年増員されることにより、確実に地域防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりに資することができる。 2、学校・中学生が地域を巻き込む防災教育を実践展開し、学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりに波及・寄与できる。さらに、これらの共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織して連携・協働を推進する。 3、本プランの実践により、大震災がもたらした現実を知り、教訓を学び継承できる。そして、主体的に復興支援に取り組むことで、持続可能な社会づくりを担う人材を育むことができる。 4、防災教育を通じて学校と地域が協働し、教員・生徒と住民の関わりと繋がりを深め、両者の絆づくりを推進し、希薄な人間関係等の地域が抱える課題の解決を図ることが可能となる。 5、本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。 【課題】 1、本実践プランでは、防災・減災に関心を示さない地域住民を地域防災訓練に参加させるための方略が不十分である。 2、地域住民の防災意識を向上させるため、中学生とその卒業生は、自らが防災・減災等の地域防災を担うだけでなく、近隣住民を地域防災に巻き込む術と仕組みづくりを、学校と一緒に構想・構築する。 3、本プランでは国・市・区の行政や消防署の支援と協力により、公助の理解を図っている。しかし、具体的な公助力を活かした連携の在り方を今後取り込んでいくことが必要である。 4、現在、本校学区は大規模マンション建設に伴い、新たな人口の急増と新たな町内会の発足の見込であり、安全・安心な地域づくりや地域防災などの新たな課題が生ずる懸念がある。
成果物	○地域防災訓練の実施企画・計画書やアンケート調査と分析結果 ○本校避難所運営マニュアルの改訂版(仙台市作成版に基づく改訂) ○取材報道班が作成した号外紙(訓練当日の午後に発行) ○生徒会がプレゼン発表に使用した「生徒・住民向け防災学習成果プレゼン資料(パワーポイント)」 ○学校と地域組織との連携体制の構築が推進 ○補足資料「安全・安心な地域づくりに資する、中学生が主導する防災教育と地域防災訓練」

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

４．苦労した点・工夫した点

プランの立案と調整で苦労した点工夫した点	①現任校では大震災から５年が経過し、震災の記憶と教訓が忘却・風化が懸念されている現況から、校長が転任してきた昨年度から津波被災地の視察や交流をプランニングしていた。昨年度には甚大な津波被害を受けた気仙沼市教委に打診をし、今年度に実施のプランを現地の中学校等と検討することになっていたものの、震災以来から多くの交流・視察が予定されており、新た日本校が入り込む予知がないことを確認するに止まった。そこで、県内の他地域との交渉を行い、②の亘理町と若林区に支援をいただくこととなり、新規プランを互いの協議により策定することとなった。 ②１年生約２００人と２年生約２００人は、９月に津波被災地の仙台市若林区や亘理町・山元町を視察し、被災農家での奉仕活動や地元の中学校と交流を行っている。この実践プランでは、仙台市農業園芸センターや(株)荒浜アグリパートナーズ、亘理町の商工観光課や農林水産課、観光協会、荒浜地区まちづくり協議会、地元の語り部の皆様など、多くの組織や方々との調整やプランの検討、そして現地の事前見学などにより、プランを立案している。このため、プランを充実・拡充するための検討と協議に、時間と労力が費やされた。 ③中学生が主導する地域防災訓練は、昨年度から実施しているものの、毎年、新たな方々の協力を得て実施内容の拡充を図っているため、プランの立案に様々な組織の方々とともに検討・協議し、プランづくりを行っている。 ④仙台市教育委員会が作成している「防災教育副読本」を有効活用するため、各実践プラントとの関連づけを図り、改めて実施計画等のプランを立案している。
準備活動で苦労した点工夫した点	⑤津波被災地の視察･交流の実践プランの実施においては、生徒が被災に行くためのバス借用料が生じるが、その予算として公益財団の教育助成を申請し、予算獲得のために採択される必要があったため、申請書作成に尽力した。 ⑥地域防災訓練の炊き出しでは、昨年度は寸胴鍋やガスコンロなどの備品を他校から借用していたが、今年度は公益財団法人ＪＫＡの新世紀未来創造プロジェクトに採択申請を行った。その結果、採択を受け、炊き出し用の備品等を購入し、今年度から本校の備品にて炊き出しを行うことができた。 ⑦地域防災訓練では、昨年度に加えて新たに支援をいただく組織や企業等との検討会を設け、立案したプランに基づいて準備活動を計画的に行っていたものの、それぞれの都合や実情により計画から準備が遅れた。しかし、各組織や企業に尽力をいただき、実施日の前日には準備が整った。 ⑧防災教育シンポジウムで行う講演内容を決定する際、本校学区が水害地帯であることから、昨年度は異常気象と洪水被害をテーマに、今年度は本校学区近くに存在する長町・利府活断層があることから活断層による地震と災害をテーマに考えていた。両年ともに１１月にシンポジウムを開催する予定でおり、講師である大学の研究者の選定を各年度初めに終えていた。このような中、昨年９月には関東から東北南部に台風による大水害、今年４月に熊本や１０月に鳥取の活断層地震が発生した。そこで、両年ともにシンポジウム参加者の増員を図るため、講師とその講演テーマを地域住民に周知を図り、講演の準備活動を行った。本校学区にて洪水被害や活断層の災害がおよぶ可能性があることから、多くの住民に講演に参加を呼びかけた。しかし、結果として講演に参加した住民は、２００人までに達しない状況に止まった。マスコミ報道により、住民の関心は確実に高まっているものの、参加が増えない理由に、開催日が良くないのか、周知が徹底されていないのか、何が要因なのか、平成２９年度の開催に向けて要因追究と準備活動内容を検証・検討していく必要がある。

実践に当たって苦労した点工夫した点	○津波被災農家に弟子入り体験では、農家が毎年、手作業で行っている綿花畑の除草作業を支援している。弟子入り体験当日に小雨が降り続いており、中止することを考えていたが、生徒たちが被災地の視察や農家の震災からの大変な思いや苦労を聞き、除草作業を行うことにした。生徒たちは雨に濡れながらも、黙々と除草をしていたことに、引率教員や農家の方々が熱い思いを抱かされた。 ○地域防災訓練では想定外の事態や状況が生じたものの、各班活動を担当した生徒たちが対策本部の町内会長に報告・相談しつつも、臨機応変に判断し、実行に移したことにより、各班活動を滞りなく完了することができた。 ○炊き出し配給時に提供する食器のうち、２０個入りのプラスチックスプーン袋内に黒い粉が混入していることが確認された。このため、スプーン購入店に連絡を入れたものの、変わりの在庫がないことから、急きょ、炊き出し配給班が洗浄してスプーンを配布し、難を切り抜けることができた。 ○地域防災訓練のコース別学習において、国土交通省・東北事務所の講演が予定時間を過ぎても終えず、他のコースの開始時刻を遅らせたり、続く学習時間の短縮を図ったり、生徒会が進捗と進行状況を常に把握して、対応に苦慮しつつも混乱もなくスムーズに運営できた。

５．他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・同窓会組織	○東北大学、宮城教育大学、 ○仙台市教育委員会 ○仙台市立郡山中学校、東長町小学校、八本松小学校 ○亘理町立荒浜中学校 ○茨城大学工学部都市システム工学科	○中学生が主導する地域防災訓練の指導助言、防災教育シンポジウムの講師、 ○地域防災訓練に参加 ○津波被災地視察･交流 ○地域防災訓練等の参観
保護者・ＰＴＡの組織	本校ＰＴＡ	地域防災訓練や防災教育の協力支援
地域組織	町内会長、民生委員児童委員、社明委員、交通指導隊、消防団、日赤奉仕団、老人会、婦人防火クラブ、社会福祉協議会、青少年健全育成協議会、おやじの会(郡山中・学校支援組織　コンソーシアム「あすと郡山」)	「中学生が主導する地域防災訓練」において、生徒の活動班を分担支援、地域一斉清掃など学校と地域の連携事業の推進
国・地方公共団体・公共施設	○仙台市農業園芸センター 亘理町の商工観光課や農林水産課、観光協会、荒浜地区まちづくり協議会、地元の語り部の皆様 ○八本松市民センター、郡山児童館 ○国土交通省東北地方整備局 仙台河川国道事務所 仙台市消防局太白消防署 ○仙台市、太白区	○１・２年生による津波被災農家弟子入り体験と津波被災地視察・交流活動 ○部活動単位の奉仕活動、八本松・地域防災訓練の支援 ○地域防災訓練のコース別学習の講師 ○避難所担当課
企業・産業関連の組合等	○(株)荒浜アグリパートナーズ ○みやぎ生協・太子堂店 地元燃料店 ホームセンター ○國際観光	○津波被災農家に弟子入り体験を受入 ○中学生が主導する地域防災訓練において、食材や消耗品の提供 ○津波被災地の視察支援
ボランティア団体・ＮＰＯ法人・ＮＧＯ等		
職業、職能団体・学術組織、学会等	公益社団法人 ○日本ユネスコ協会連盟 公益財団法人 ○ちゅうでん教育振興財団 ○ＪＫＡ「新世紀未来創造プロジェクト」 ○日本教育公務員弘済会宮城支部	防災教育関係備品や消耗品、津波被災地視察･支援等の経費予算補助

６．成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として得たこと	１、メインプランである「中学生が主導する住民参加型の地域防災訓練」を毎年行い、地域防災力と防災意識を年々高め、防災・減災の知識やスキルと防災対応能力を育み、自助と共助の術を習得できる。 そして、将来の地域防災を担う人材が育成され、毎年増員されることにより、確実に地域防災力を向上させ、安全・安心な地域づくりに資することができる。 ２、学校・中学生が地域を巻き込む防災教育を実践展開し、学校と地域の共通目標である地域防災力の向上と安全・安心な地域づくりに波及・寄与できる。さらに、これらの共通目標の達成度を高めるため、両者による連合体を組織することにより、連携・協働を推進できる。 ３、本プランの実践により、大震災がもたらした現実を知り、教訓を学び継承できる。そして、主体的に復興支援に取り組むことで、持続可能な社会づくりを担う人材を育むことができる。 ４、防災教育を通じて学校と地域が協働し、教員・生徒と住民の関わりと繋がりを深め、両者の絆づくりを推進し、希薄な人間関係等の今日的な地域が抱える課題の解決を図る可能性が高められる。 ５、本プランによる防災教育を通じて、生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ心と姿勢を変容させ、共助の心を通い合わせる豊かな人間性を育むことができる。 ６、本プランの実践とその成果は、生徒や教員が積極的に外部発信し、防災教育に関する専門的有識者から第三者評価を受け、実践プランの確かな改善と進化を図り、防災教育の拡充・発展を推進できる。
全体の反省・感想・課題	プランタイトル「郡山中学校が小学校や地域と協働する防災教育活動プラン」は、“２、プランの年間活動記録”やＰ３の“実践プログラム番号：ＮＯ．０”で示したように、年間にわたる防災教育による実践プランである。(年間計画・P3 の表　防災教育の実践概要(平成２８年度)：実践プランのねらい　①震災と教訓を学ぶ→②復興を知る、支援する→③防災・減災減災の知識、スキル、行動を習得する→④学習成果を発信する→⑤実践を評価する)そこで、各実践プランでは、可能な限りアンケート調査を実施し、その成果や課題の抽出ために分析を行い、客観的な成果の把握に努めている。しかし、各実践プランの相乗効果については、今後分析を行う必要があると考えている。そこで、この相乗効果を高めるため、様々な防災教育の体験的活動を積み重ね、その総括としてメインプランである「中学生が主導する地域防災訓練」を実践し、生徒が習得しているであろう防災・減災に関する知識やスキル、行動・能力を実行に移すプラン構成・構造を創り上げている。すなわち、この構成・構造が有効で効果的な働きとなっているか否かを相乗効果から検証することがこれからの課題であると考えている。
今後の継続予定	今後も、本プランタイトル「郡山中学校が小学校や地域と協働する防災教育活動プラン」の実践プランを可能な限り継続し、各プランの成果や課題、そして各プラン間の相乗効果を継承し、各プランの改善・進化を図りながら年間の防災教育の全体構成・構造の発展展開を検証していく。 また、本プランのさらなる新規性、独自性、汎用性を追究し、そして実践プランの有効性と有用性を検証して継続性、発展性を常に高めていきたい。 そして、これらの実践研究については生徒や教員が積極的に外部に発信する機会を創出し、防災教育の関係者やその有識者等に第三者評価を求め続け、本プランの進化・発展を求め続けたいと考えている。 さらに、本プランを継承する人材の育成も推し進める方略についても考慮しつつ、本プランの実践を継続するつもりである。

７．自由記述欄　※6

※6　自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守でお願いします。

本実践プランは以下の表に示すように、これまで４つの中学校を歴任した校長が取り組んできた実践である。いずれの学校においても、町内会や婦人会、消防団等の多彩な地域組織からなる学校支援組織を設立している。この組織の構築により、多様な体験的活動に基づく防災教育の実践プランを、４中学校とその地域の特性に応じて実践モデル(次項の表)を創出し、学校と地域が協働する教育を推進しており、他にあまり見られない特徴と独自性を生み出している。

学校名	地域特性の概要	生徒数	学校支援組織の名称・人数（町内会、婦人会、消防団、ＪＡ等）	生徒主導の地域防災訓練
Ａ中	中山間地域で、少子高齢化と過疎化、兼業農家が多い	約 50 人	**丸東・改援隊**　３９人（隊長：PTA 会長、名誉隊長：公民館長）	H21～H22（H24. 廃校）
Ｂ中	県南の中心地近郊で、跡継ぎ不足で農業が衰退	約 100 人	**金未来隊**　４６人（隊長：公民館長）	H22 から継続実施
Ｃ中	仙台近隣の丘陵地で、大規模宅地開発されて二十数年経過	約 320 人	**チームＭＹ・ＳＰ**　４８人（会長：連合町内会長）	H25 から実施
Ｄ中	仙台の副都心で大規模再開発地域、住宅と商業施設が混在	約 600 人	**コンソーシアムあすと郡山**　３２人(会長：ＰＴＡ会長)	H27 から実施

例えば、Ａ中やＢ中の地域はかつて農業が主産業だったが、機械化が進み、今日中学生は我が家の農作業を手伝うこともなく、農業を知らない。また、コンビニはどんな田舎にも行きわたり、地産地消などその土地の味が消え、中学生は全国共通の味付け食品を食している。そこで、Ａ中・Ｂ中において中学生が“農家に弟子入り体験”を学校支援組織による協働のもと、畑作と稲作の農業を昔ながらの手作業で行い、収穫物を漬物等に加工する体験を全校生徒で行っている。中学生は農業を理解し、働くことの大変さを肌で感じ、収穫する喜びと昔ながらの地元の味を知ることになる。無農薬で栽培し、収穫する米、大豆は味噌、梅は梅干、大根は沢庵など、災害時の学校備蓄食材も兼ねて食材加工を行う。中学生はコンビニ食には有り得ない地元食と昔から受け継がれている味に驚き、キャリア教育と食育を収穫の喜び、食べる楽しみを通じて体感しながら学んでいる。

Ｃ中やＤ中では“津波被災農家に弟子入り体験”や“津波被災地を視察・交流活動”を行い、被災地とその復興を知り、大震災の教訓を学び、受け継ぐ活動に取り組んでいる。これらの取組体験から学び取る自助と共助については、津波被害を知らない中学校において重要な教育課題に挑む教育でもある。この課題は「いじめ問題の根絶」であり、防災教育がポジティブな根絶に成り得る。ネガティブな「いじめをするな」「いじめをゆるさない」教育から、大震災から自助“自分の命は自分で守る”と共助“人を助け、支え、励まし合う”を生き抜いた被災者から学び取る教育に転換できる。つまり、実践している防災教育は、防災・減災の知識やスキルを学ぶだけでなく、いじめ問題に果敢に立ち向かう実践でもあり、中学生の心を育む教育にも成り得ている。

さらに、校長は歴任したいずれの４中学校においても“中学生が主導する地域防災訓練“を実践しており、本実践モデルのメインプランとしている。この訓練は、地域で行う住民参加型の地域防災訓練を中学校と協働し、中学生が避難所開設・運営、炊き出し調理、集団避難誘導、救急救護、災害情報収集、災害対策本部などを担い、学校支援組織の援助のもとで行う訓練である。中学生は”校内・炊き出し調理コンテスト“や”農家に弟子入り体験“等の多様な体験

（自由記述：１／３）

的活動で習得してきた知識やスキルを活かし、この訓練の実行者として自主・自立して実践する。全体指揮は災害対策本部の町内会長の援助を受けて生徒会役員が行い、各活動の進捗状況把握と各活動間の連携等の調整と指示をする訓練である。この訓練から、中学生は普段ほとんど関わることがない避難者役の住民の方々と知り合うことができ、多くの住民は中学生の活動に感謝と賞賛を表し、世代を超えた関わりや繋がりをも生じている。

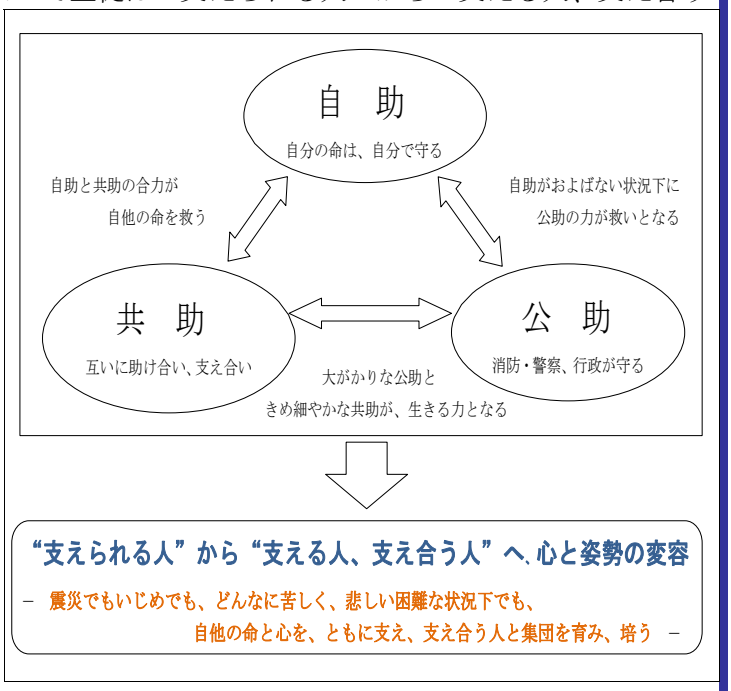
	実践プランのねらい			実践プランの内容		実践の学校			
						A 中	B 中	C 中	D 中
1	震災を学ぶ	地震を学ぶ		東北大学地震･噴火予知研究観測センター長の講演		○	○		○
		教訓を学ぶ		津波被災農家の方々の講演（講師：若林区荒浜の被災農家）				○	○
2	復興を知る・学ぶ	復興支援の活動を行う		津波被災した中学校の復旧支援活動			○		
				津波被災の農家に弟子入り体験学習				○	○
				仙台復興シンボルイベントを支援する清掃奉仕活動				○	
3	震災に備える	備蓄食材の栽培加工		農家に弟子入り体験学習	手作業で稲作（田植え、除草、稲刈り、脱穀）	○	○		
					梅干し造り(収穫、天日干し、シソ漬け)	○	○		
					みそ造り(大豆種まき、除草、収穫、加工)	○			
		地域特性リスクを学ぶ		学区内ハザードマップの作成 行政等作成のハザードマップを活用する学習活動		○	○	○	○
		防災スキルを習得する		校内・炊き出し調理コンテスト 訓練：炊き出し、避難所開設・運営、避難誘導等		○	○	○	○
		避難所の設備を整える		移動式・かまどベンチを作成(普段はベンチ、有事に“かまど”で使用)			○	○	
		備えを調べる		１０テーマ別の学習と発表(リスクとハザードの調査と対応方法を調査)				○	
4	訓練を行う メインプラン 習得した知識・スキルを実践活用	支援組織と訓練の検討(企画・内容・計画・実行)		生徒が訓練の企画・内容・計画を策定し、学校支援組織と協議・検討(学校支援組織は、生徒による訓練実行に向けた助言と補佐を事前に決定)		○	○	○	○
		中学生が地域防災訓練を行う		中学生が主導して地域防災訓練を実施：中学生が訓練内容毎に６班に分かれ、組織が分担支援して実施		○	○	○	○
5	実践を広める	成果を発信	地元へ	A 中：議会堂にて模擬議会を開催(教委職員や議員との防災関連議案を質疑)、生徒が地域ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑを開催		○	○	○	○
			外部へ	【県内外に発信】：防災教育チャレンジプラン、ぼうさい甲子園、ユネスコスクール東北大会など		○	○	○	○
6	評価・改善する	PDCA マネジメント	自己評価	生徒や住民等へのアンケート調査とデータ分析による検証		○	○	○	○
			外部評価	防災教育チャレンジプラン・ぼうさい甲子園等での防災・減災に関する専門家による第三者評価		○	○	○	○
			学校関係者評価	大学教官、教育委員会、学校支援組織による助言等の指導		○	○	○	○

校長は歴任の中学校で以上の実践モデルを毎年実施しており、中学生は防災・減災の知識とスキル、行動能力を習得し、毎年卒業している。このことは地域防災を担う人材が毎年確実に育まれ、地域防災力が年々向上することになる。また、本モデルでは町内会や婦人会、消防団などの多彩な地域組織から構成される学校支援組織を構築し、この組織の支援を受けて各実践が地域を捲き込む取組にしており、学校と地域の協働が図られている。さらに、組織の構築と

（自由記述：２／３）

住民参加型の訓練などにより、中学生が住民と世代を超えた関わりや繋がりを持つことにもなる。本実践モデルは、防災教育を通じて中学生に自助と共助を培い、今日的教育課題に対峙する心を育み、自己効力感・肯定感を高めることができる。そして、学校と地域の共通する目標である地域の防災力向上と安全・安心な地域づくりの担い手を育み、持続可能な地域コミュニティの形成に寄与・波及できる教育実践モデルである。４校とその地域の概要を示した表のように、規模や特性が異なる学校とその地域で、４校にわたり９年間この実践モデルを継続実践している。このように、このモデルには汎用性、発展性、有効性、独自性を有すると共に、多様な教育的成果や効果が込められている可能性を持ち得ていると考えられる。

そこで、現任校のＤ中では、防災教育といじめ問題対策との関連を図り、教育実践にも取り組んでいる。Ｄ中では、防災教育の実践活動において、いじめ対策方略のための教育を内包総括することを目指し、本実践を構想している。この防災教育といじめ対応の融合教育では、防災教育の活動内容である自助、共助、公助をこの構想の礎的な視点として捉え、図のように、防災教育といじめ対策方略の関連とその融合に挑んでいる。P29の表に示した地域防災訓練のアンケート結果やP34の成果に示したように、防災教育は人と人の絆を育み、人の心を培う、心に響く教育でもあり、防災教育によって生徒は“支えられる人”から“支える人、支え合う人”へ、心と姿勢を変容させる成果と効果もある。そして、防災教育は自助・共助・公助の捉え方の視点から、いじめ対応対策に波及・寄与する可能性があり、両者の融合教育を意図的・計画的に促進・推進することで、その両者において成果や効果を相乗的に高める可能性が期待できるものと考える。



また、防災教育において「地域の防災力の向上」と「安全・安心な地域づくり」は地域だけの目標ではなく、学校と地域の共通目標である。本実践では、この共通目標を達成するため、防災教育を通じて、学校、家庭及び地域が相互に協働し、子どもも大人も学び合う教育体制を構築して地域全体で学びを展開しつつある。その構築においては、地域と学校がパートナーとして、共に子どもを育て、共に地域を創るという理念に立ち、地域の教育力の向上をも目指している。その中で、子どもを中心に人々が参画・協働する地域社会を創造し、学校を核として地域の大人と子どもが学び合い、地域コミュニティの活性化を図る地域づくりを推進する。このことは、地域とともに共存する学校への転換を図ることになり、地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもを育むことにつながるものと考える。

以上のように、本融合教育は、防災教育といじめ対策における重なる視点(自助・共助・公助)に基づいて、中学生が主導する多様な防災教育に地域をも巻き込み、住民等と共に学び合い、関わり合い、繋がり合うことで、いじめ対策との相乗効果を図る取組である。この取組では、学校を核として、地域と学校が連携・協働して、地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支えていく活動を積極的に推進している。その際には、地域の人的・物的教育資源の活用や社会教育との連携により、「社会に開かれた教育課程」を実現するものである。

（自由記述：３／３）